
鬼と仏

快丈風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼と仏

【Nコード】

N3534A

【作者名】

快丈風

【あらすじ】

時は幕末。混乱をきわめるこの時代に、己の信念を曲げず、風のごとく駆け抜けて行った男たちがいた。……名は「新選組」。そして彼らの中には、鬼と仏と呼ばれる対照的な二人が居たのだ……。

鬼の回想く出会いく

優しいそよ風。

柔らかな陽射し。

……絶好の昼寝日和である。

河原の土手添いに男が一人寝ていた。

男は深く笠をかぶり、昼寝をしていた。

「もし、薬屋さん」

男に声をかける者がいた。

ところが男は、気付かないのか面倒くさいだけなのか、全く反応しない。

「薬屋さん？」

男はうつとおしそくに寝返りをうつ。どうやら起きているみたいだ。

「薬屋さん！」

「うつせえなあ。お前、俺が今何してると思ってんだよ！」

男はそっぽを向いたまま、かつたるそうな口調で怒鳴った。

「昼寝ですか？」

「分かってるなら出直して来いよ！」

そう言っ て寝息を立てはじめた男。

すると声をかけた男は呆れたように言った。

「旗が見えたので薬を売っていたのだと思いましたよ」

「なんだと?!」

寝ていた男は飛び起きた。 見ると確かに『石田散薬』と書かれた旗が土手に差しっぱなしだった。

しまった……。 と、男は頭をかいだ。

「薬を売って下さらないなら結構です。 昼寝の邪魔をしてすいませんでした」

声をかけた男は立ち去ろうとした。

「おい、待てよ!」

今度は薬屋の男がよびとめる。

「どうしました?」

「確かに俺が悪かった。 薬だろ? 売るよ」

そう言っ て男は薬の入れ物をごそごそ探りはじめた。

「いいんですか?」

「旗が立ってればまだ行商やってると思われてもしょうがねえ。 俺が悪い。 だから薬を売るんだ」

「……そうですか。 ありがとうございます」

そう言っ て男は懐から財布を取り出す。

「俺はな、こういう男なんだよ。 ……さて、いくつだい?」

「では、3つ下さい」

「3つ……あんた、道場かなんかの小間使いかい?」

「ええ……まあ、そんなものです。 昨日からです」

少々、歯切れの悪い男。

「そうか、ならもう一個つけとくよ。 何かと薬は要るだろ」

そう言っ て薬売りは4つの包みを差し出した。

「ありがとうございます。では、これで……」

男は小銭を薬売りに出した。

「へい、毎度あり。すまなかったな」

「いえ、こちらこそ。ではこれで失礼します」

ペコツとお辞儀をして男は去って行った。

そして薬売りの男は、男の姿が見えなくなると旗を下ろし、再び横になった。

これが、鬼と仏の出会いになるとは……二人ともこの時は知るよしも無かった……。

鬼の回想く出会いく（後書き）

補足説明。

・石田散薬

土方家に伝わる薬。手間暇かけて作られるものだが、酒と一緒に服用するため効果は不明。（酒と飲むから効果があった…という説もある）

鬼の回想と再会

薬売りはカラスの鳴き声に目をさました。辺りは夕焼け色に染まっている。

彼は大きな欠伸をし、商売道具をまとめ、河原を後にした。

薬売りは古ぼけた道場の前で足をとめる。

『天然理心流剣術道場・試衛館』

と書かれた看板が立ててあり、男はその道場の中へ足を踏み出す。

「おや、土方さんですか？」

薬売りは庭を掃いていた腰の低そうな30代ぐらいの男に声をかけられた。

「源さん！今日も掃除かい？相変わらずだねえ！」

薬売りは懐かしそうに答えた。

「ご無沙汰ですね。しばらく顔を見てませんよ？」

「ちつと忙しくてね。遠くまで行商やってたんだが今日の昼ごろに戻ってきた」

「そうなんですか。若先生なら総司に稽古をつけてましたよ。多分まだ中でやってます」

「そうか。ありがとう源さん！また後でな！」

「はい、それでは」

源さんと呼ばれた男は優しい笑顔で言った。

「エッ！オー！！総司、もっと素早く動くんだ！」

威勢の良い掛け声が2人だけの道場に響きわたる。

「はいつ、若先生！」

道場には竹刀のしなる音。

荒い呼吸。

今日こそは……今日こそは一本、若先生から取ってやる！！

総司と呼ばれた若者は、相手と少し距離を取る。

「はああああー！！」

次々と攻撃を繰り出す。すっかり総司のペースである。

「くっ……」

さっきの勢いは無くなり、防御しか出来ない相手。
表情が歪む。

もらった！！このままならついに一本取れる！

総司がトドメを繰り出そうとしたその時……彼はあるものが目に
入った。

「と……歳三さん？」

道場の外から、こちらを睨む男。正に鬼のような形相である。

「なっ……何で……」

「スキありい！！」

よそ見をした一瞬の間に、総司は頭から竹刀をまともにくらった。

「いつ……痛たい……」

防具の上からとはいえ、竹刀はまともに食らったら痛い。
総司は頭をさすりながらその場に座り込んだ。

「総司、修行がたりんど。なぜ最後で一本が取れない？」

「そつ……それは……歳三さんが……」

「なにっ？トシが？」

防具を外し、キョロキョロと見回す。

「馬鹿野郎！オレごときに気をとられてるんじゃないやねえよ！だからお前はツメが甘いんだ！」

いつの間にか薬売りは道場に入ってきた。

「トシ！久しぶりじゃないか！」

パツと明るい顔になり、薬売りに近付く男。

「よお、かつちゃん！久しぶりだな！」

「今はかつちゃんじゃないんだ。”勇”に改名したのさ」

「改名？勝太じゃねえのかい？」

「4代目の襲名が正式に決まったんでな、勢いで改名したんだ」

「そうかい。ま、かつちゃんはかつちゃんだけだな」

薬売りはニヤツと笑う。

薬売りは、名を土方歳三ひじかた としざうという。

彼は、姉の嫁ぎ先である佐藤道場で出稽古に来ていた勇と出会い、それがきっかけで試衛館に入門した。今はとある事情から、家業である石田散薬を売ったりもしている。

最近改名した若先生と呼ばれる男は近藤勇こんどう いさみという。

彼は試衛館の4代目であるが実は養子で、農民の子である。養子になる前は島崎勝太で最近までは近藤勝太と名乗っていた。

歳三と勇は年齢が一つ違い…という事もあってか、お互いを”かつちゃん”、”トシ”と呼びあう仲だった。

「若先生！悪いのは歳三さんですよっ！久しぶりにやってきたと思ったら、外から私を睨むんだもの！」

「アホッ！お前は戦の時もおれが見てたらスキを作る気か！そんな事では生き残れんぞ！」

「……歳三さんの意地悪……」

プイツとそっぽを向いたこの少年は沖田総司おきた そうじという。

年齢は勇よりも8つ下で、幼い頃に内弟子として試衛館に入門し、若いながらもメキメキと腕をあげて10代にして免許皆伝の腕前だった。

ちなみに先ほど庭を掃除していた男は井上源三郎いのうえ げんざろう。

彼は歳三や勇の兄弟子にあたり、人柄が良く真面目で努力家だ。

総司とは親類で、内弟子の話を持ちかけたのも彼だった。

「さて、それはさておき……」

歳三は再び勇に向き合う。

「長い間、顔見せなかったから薬も切れてるんだろ？やるよ」

ゴソゴソと薬を探る歳三。

すると勇は意外そうな顔をした。

「あれっ？会わなかったか？昼ごろに買ってきてもらったんだ。だからお前が今日にでも来ると分かってたんだが……」

「は？誰でえ？新入りかい？」

「新しい入門生さ。食客としてだかな。これがまた学のある人で、俺より一つ上だ」

「そうかい……」

歳三は、またか……と思わずにはいられなかった。

勇は農民の子……という生い立ちに引け目を感じているのか、家柄が良い者・学がある者を好む傾向があった。

その時、勇は外を歩いていた男を呼びとめた。

「おい、山南さん！ちょっと来て下さい！」

「山南？」

聞き慣れない名字から、この辺りの人間ではないと思い、声の方を見ると……

「はい、なんででしょう？」

色白の穏やかな顔付きの男が来た。

「おっ……お前っ！」

歳三は思い出した。この男は昼間、薬を買いに来た男だ！

「おや、昼間の薬屋さん」

色白な男も歳三を思い出したらしく、驚いた様な顔をした。

「トシ、紹介するよ。この人は山南敬助^{やまなみ けいすけ}さん。北辰一刀流を極めた偉いお方だ」

「近藤先生、よしてください。私はあなたとの勝負に敗れ、食客になつたのですから」

ばつの悪そうな山南。

「そう言わんで下さい。理由はどうであれ、もうあなたはこの道場の一員です。山南さん、こちらは土方歳三です」

山南に歳三を紹介する勇。

「山南敬助です」

山南は歳三に向かって手を差し出す。

歳三はためらったが、

「土方歳三」

とぶっきらぼうに言って、その手を握り返した。

この時、鬼と仏は初めてお互いを知ったのだ……。

鬼の回想と再会（後書き）

補足説明

・ 試衛館

当時市ヶ谷にあった、天然理心流の道場。

・ 天然理心流

通常より太い竹刀や真剣を用いて稽古をする、実践的な流派。

鬼の回想と不満

夜…… 久々に帰ってきた歳三を歓迎するため、近藤家でささやかながらも宴が催された。

「トシ、どんどん飲めよお！」

そう言つて歳三に酒をすすめるのは、勇の養父にあたる試衛館の三代目・近藤周助だ。

「はい…… 頂きます」

歳三は苦笑いしながらも周助のついだ酒を飲んだ。

歳三は酒が嫌いだ。普段は全く飲まないのだが、今日の様な付き合いでは少し飲む。そして勇も酒は苦手だし、総司にいたつては飲んだことすらないのではないか。……つまり、試衛館に出入りする者では源さん以外で人並みに酒を飲める者は居なかった。

「なんでえ、トシ、相変わらず酒がちつとも減つてねえ」

周助はやれやれと呟くと、

「山南さん」

と山南を呼び、酒をついだ。 山南は礼を言つて美味しそうに酒を飲んだ。

「あんた、酒が好きか？」

歳三は山南に聞く。

「大好きではありませんが、嫌いでもありませんよ」

と柔らかく言つた。しかし歳三はなぜかその言い方が鼻につき、
「そうかい」

と冷たく言い放ち、そつぱを向いてしまった。

それを見て勇は山南に、

「気にしないで下さい。コイツはこういう奴なんです」と言い、歳三の背中を軽く叩いた。

そこに総司がやって来て、

「でも先生、私なんか飲んだことすらありませんよ」と周助に言う。

「おめえはただの童わっぱなんだよ」

顔を赤くしながら周助は答える。

「なら、歳三さんも若先生も童ということになりますね」

総司はそう言つと、おかしかつたのか一人で笑っていた。

「総司！おめえと一緒にすんなっ！」

歳三はそう言つて、残りの酒を飲み干す。

「歳三さんは可愛いなあ」

とニコニコして、総司は自分の席へ戻った。

山南はその様子を見ながら、少し困つたように微笑んでいた。

「皆さん、お茶をいれてきましたよ」

源三郎が酒を飲まない総司たちにお茶を持ってきた。

源三郎は試衛館の古株で、周助の父（つまり2代目）の頃から出入りをしていた。

これといって剣の腕前は秀でているわけではないが、人一倍の努力家である。また今のようにお茶くみや掃除なども自らしているため、親しみやすい人であった。

その時、急に

「ごちそうさまでした」

と山南は言い、立ち上がった。山南は早々と自分の食事を片付け、部屋を出ていった。

山南が完全に部屋を立ち去ったのを確認すると、歳三が口を開いた。

「なんでえ、アイツは。愛想ねえなあ」

歳三は吐きすてるように言った。

「トシ、それはないだろう。山南さんは良いお方だ。今はまだ慣れてないんだよ」

「どうか。俺はアイツが俺らを見下してるような目で見てる気がするがな」

歳三は源三郎のいれたお茶を飲みながら言う。

「それはひがみでしょ？歳三さんの悪い癖ですよ」

総司がアツサリ言い放つ。

「違うよ。俺はアイツの態度が気に入らねんだ」

「でも、それは歳三さんが山南さんを気にしているって事でしょ？」

歳三は言葉に詰まる。そして、

「もついい」

と出て行ってしまった。

歳三は悔しかった。

博学だと山南を誉める勇。自分の心の内を見透かされたらつても

下の総司。

ちくしょう……。みんなアイツが良いのかよ。長年一緒にやってた俺よりも……。

外の空気を吸おうと、トシは草鞋わらじをはき、すっかり暗くなった外へ出た。

うーん……とのびをして、ふと道場の方を見ると……なぜか明かりがついていた。今日の稽古は終わり、皆帰ったはずの道場……。

まさか物盗りか？しかし何故道場なんだ？

歳三は少し早足気味に道場へ向かった。

鬼の回想〜真剣勝負〜

道場には、物盗りではなく、一人の男が竹刀で素振りをしていた。歳三は一目見て誰か分かった。

「……アイツ……」

アイツとは……そう、山南敬助である。

細く華奢な体と弱々しそうな青白い肌の見ただ目からは想像できない力強い素振り。しかし、それは天然理心流とは異なるものだった。

歳三は道場の死角になる柱の陰に隠れた。隠れるつもりも隠れる理由もないのだが、山南に声をかけようとは思わなかった。

山南は黙々と素振りを続ける。

その時、声が聞こえた。

「そんな所にいらっしやらずに、こちらへお越しく下さい」

歳三は驚いた。

山南が急に声をあげたからだ。

「そちらにおられるんでしょう？」

しかも、歳三に気付いている。

ギシッと、古い道場の床が軋む。

歳三はゆっくりと柱の陰から現れた。

山南はやはり笑顔だった。

「何かご用ですか？」

山南が尋ねる。

「明かりが見えたんで来ただけだ」

歳三はぶっきらぼうに言った。

「すいません。ただ、素振りがしたくて……」

「そうか。俺は物盗りか何かかと思った」

歳三がそう言うとき山南は苦笑いで

「そうでしたか、それはお騒がせしました」と謝った。

二人の間に沈黙が流れる。

「あんた、かつちゃんに負けて入門したって本当か？」

歳三が沈黙を破る。

「そうですね。よくご存じですね」

「あんたが言ってたんだろ。かつちゃんがあんたを紹介してた時に」

「そうでしたね」

山南はまた苦笑いだ。

「俺と戦わねえか？」

山南は驚いて歳三を見た。

「私とあなたがですか？」

「そうだ。北辰なんとかって流派も見てみたいし、何よりかつちゃんが戦った男と戦ってみたい」

歳三は山南に近づきながら言った。

山南は少し考えると、またいつもの微笑みを歳三に向けながら、

「分かりました」

と言い、側にあった竹刀を歳三に渡した。

歳三はそれを少し強引に受け取ると、棚から自分の防具を取り出した。

山南と歳三は互いに向かい合い、正座をして防具をつける。

「あなたは赤い面紐ですか。珍しいですね」

すでに準備が整った山南が歳三に言った。

「悪いか。俺の好みだ」

歳三はその面紐をしっかりと結び、立ち上がった。

「いいえ。良いご趣味ですよ」

山南も立ち上がる。

「では、相手から面を取れば勝ち。その時点で試合終了……でどうでしょう？」

山南は構えながら言う。

「意義なし。じゃあ……始めようか」

歳三はそう言うなり、山南に飛びかかった。

歳三は一応、試衛館の門下生だ。ところが彼は型にはまるのを嫌い、天然理心流を高めるのではなく、自己流の戦い方を身につけていた。そのため実力はあっても道場の中では下の方だった。

「君は天然理心流かい？近藤先生とは違う感じがするが……」

山南は歳三の竹刀を受けとめながら聞いた。

「俺は試衛館の門下生だけどなあ、自己流なんだよつー！」

竹刀を山南から離し、間合いを取る。

「成程。これは面白い」

山南は防具の向こうで笑った。それはいつもの微笑みではなく、少し不敵な笑みだった。

山南にスキは無い。鋭い殺気すら感じる。
そして……自分はその殺気に怯んでいる。

山南の剣先は小刻に揺れている。それが嫌に目につく。
これが北辰一刀流というものなのか？

……しやらくせえ！

歳三は再び山南に突っ込んでいった。
山南の頭上を狙う。

山南は受けとめようと竹刀を上げる。

歳三の狙いはそこだった。

竹刀を上げる事で山南の意識は頭上に集中する。その時に一瞬出来るスキを……。

歳三は寸前で竹刀を胴に向けた。

……もらったっ！！

歳三は山南を突き飛ば……

その時、歳三の天と地が引っくり返った。

気づいたら歳三は道場の床に寝そべっていた。
同時に激痛を感じた。

「うぐっ……痛てえ……」

左の脇腹を押さえ、うずくまる歳三。

一体何が起こった？

絶対に山南をとらえたと思ったのに……。

山南が駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？すいません、怪我は……」

山南は歳三を起こし、壁にもたれさせた。

「つい力が入ってしまいました……」

山南は歳三の面紐を外して防具を取り、怪我がないか調べられる範囲で調べた。

「目立った怪我は無い様ですね」

山南は少し安心して自分の防具を外し始めた。

「なんで……なんでダメだったんだ……？」 歳三は痛みを堪えながら山南に聞いた。

山南は微笑んで答えた。

「アナタは自分の戦略に自分でかかったんですよ」

どういうことだ？サッパリ意味が分からない……。

歳三が考えていると山南は続けた。

「アナタは私の頭に打ち込むフリをしてスキを作り、私の胴を狙った。ところが私はアナタの剣を見きったんだ」

……何っ？

「アナタの剣先は私の頭上に向けられていたが、視線は胴にあった。だから私はその時にがら空きだったアナタの脇腹を突いたんですよ」

「……そうだったのか」

完全に歳三の負けだ。スキを作ったのは自分自身で、しかも山南が自分の剣を見きっていたとは気づかなかった。

「でもアナタは強かった。だから私は本気になったんです。それで自己流とはもったいないです」

山南は歳三の目を見て言った。

「俺は自己流だが試衛館の門下生だ。今は薬売ったりもしてるが、本業はそれなんだよ。だから表向きの流派は一応、天然理心流だ」
歳三は山南に言った。

「そうですか」

山南は微笑んだ。

すると歳三は不意に山南に言った。

「お前、ワザと負けたる？ かつちゃんに」

山南の動きが止まった。

「図星か？ こう言っちゃ何だが、あの人は4代目とはいえ、それほど剣の腕は持ってない。免許皆伝の腕前なら簡単に倒せただろ？」

すると山南は笑って言った。

「私はね、面白いことが好きなんですよ」

そう言つと山南はくるりと向きを変え、屋敷の方へ歩きだした。

今まで喧嘩に負けたことのない歳三の、初めての敗北だった。

鬼の回想〜真剣勝負〜（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。いかがでしょうか？ 4話にしてやっと作者挨拶です（汗）

実はまだ内容としては全体の10分の1も進んでいません（苦笑）
まだまだ続きますので、よろしければ今後も読んで頂ければ幸いです。

ではまた5話でお会い致しましょう！

壬生の狼〜宴会の後始末〜（前書き）

補足説明（１）

・免許皆伝（者）

師が武術の奥義など全てを伝えたと認めること（認めた者）。

・目録

習得した技と、歴代の宗家の名前が記されたもの。

壬生の狼ゝ宴会の後始末ゝ

歳三は目覚めた。

彼は長い夢を見ていた。しかも、自分が初めて負けたという嫌な思い出の夢を……。

「おや、土方君、起きたかい？」

声のする方を振り返ると、山南が居た。机に口ウソクをともして何か難しそうな書を読んでいる。

自分は布団に寝かされていた。……なぜ？

「山南さん、俺……」

「君と私と総司で話をしていたが、気づいたら君だけ寝てたんだよ」
「なっ……なら起こせば良かっただろ……」

土方は布団から飛び出た。

「長旅だったから疲れたと思ったし、総司も土方さんは寝起きが悪いですからって言うし……」

山南は少し申し訳なさそうだ。

「総司が？あの野郎……。山南さん、悪かった。自分の部屋に戻る」

歳三は立ち上がって山南の部屋を出た。

後ろから、

「おやすみ」

と小さく聞こえた。

歳三や山南たちは京都に居た。しかも今日着いたのだ。歳三と山

南の出会いから6年の月日が流れていた。

6年の間に色々な事が起きた。

勇は嫁をもらい、タマという娘も生まれた。また天然理心流の4代目を正式に襲名し、名実共に試衛館の道場主になった。そしてその試衛館にも新しい食客が増えたのだった。

歳三が自室へ帰ろうとした時、後ろから呼びとめる声が聞こえた。

「土方さん！土方さん、お待ちください！」

振り返ると平助が居た。

彼は藤堂平助^{とうどうへいすけ}。年は総司よりも2歳下で、試衛館の食客では一番若い。山南と同じ北辰一刀流で、目録の腕前だった。

「どうした？」

「それが……近藤先生が酔いつぶれてしまいました……」

平助は弱々しく言った。

「なっ……総司は居なかったのか？源さんや左之助や新八は？」

土方は怒り気味に言った。

「それが、芹沢先生と付き合って飲んでいたら皆さん酔って寝てるんです……沖田さんは飲んでないのに騒ぎ疲れて寝てます。私にはどうしようもなくて……」

「まあ、良い。お前は酔わなかったただけマシだ。ったく、初日だつていうのに何を考えているんだか……」

歳三は頭が重かった。京では八木源之丞^{やぎげんのじょう}氏の屋敷に居候させてもらっているのだ。なのに初日からこの様では印象が悪い。

「平助、行くぞ。全員叩き起こす……」

「はいっ！」

歳三と平助は宴会の催されていた部屋へ急いだ。

部屋へ行くと、報告どおりの状況だった。
まずは酔っていない総司を起こす。

バシッ！！

歳三は勢いよく総司の頭を叩いた。

「ひ……土方さん、もう少し優しくしても……」

平助は、ビクビクしながら言う。

「コイツに甘やかしは無用だ、平助」

歳三はしみじみと言う。

するとともに総司が起きた。

「なんなんですかあ……土方さん、起きたんですか」

総司は叩かれた辺りをさすり、欠伸をしながら言った。

「ったく、何でもこうなる前に近藤さんを止めなかった？」

歳三は呆れながら言う。

「良いじゃないですか。今日はめでたい席なんですし、先生だって
きつと騒ぎたかったんです」

ケロッと言う沖田。

「限度があるだろう。みんな酔いつぶれるとは、情けない。お前も
近藤さんたちを起こして部屋まで連れて行くんだ」

「分かりましたよ。……これだから土方さんは寝起きが悪くて困る
な……」

ブツブツと小さな声で総司が言ったが、歳三にひと睨みされて近
藤と源三郎を起こしにかかった。

「原田さんっ起きてください！」

平助がいびきをかいて寝ている男を必死に起こしている。その隣
には既に目が覚めてボーッとしている男が居た。

先に目覚めた方が永倉新八で、いびきをかいているのは原田左之
すけ

助だ。

永倉は歳三より4歳下で、松前藩士の家に生まれた、れっきとした武士だが、脱藩して試衛館の食客になる。剣は神道無念流の免許皆伝の腕前だ。

横の原田左之助は歳三より5歳年下で、種田宝蔵院流で槍術を学び食客になった。

この二人も平助同様、この6年の中で出来た同志である。土方は一番厄介な者を起こしにかかった。

「芹沢先生、起きてください。お部屋に戻りましょう」

歳三が声をかけるものの、起きる気配が全く無い。

横ではこの芹沢の手下の平間と平山も一緒に寝入っている。

この男、名を芹沢鴨せりざわかもという。彼は水戸の尊皇攘夷派集団に所属した後、歳三たちと出会った。永倉と同じ神道無念流の免許皆伝者でもある。横で寝ている平間、平山は芹沢についてきた者たちだ。

歳三はいつこうに起きる気配を見せない酔っぱらいに腹が立ってきた。

「芹沢先生！起きてください！」

つい怒鳴ってしまった歳三の後で声が聞こえた。

「あー、先生はそうなってしまうてはもう無理だ。部屋までお連れする」

見てみると芹沢の残りの手下・新見錦にいみにしきと野口健司のぐちけんじだった。

「野口。お前は平間たちを」

と命令すると、野口は二人の方へ小走りで近づき、声をかけはじ

めた。

新見はゆっくりと歳三の方へ歩み寄ると、芹沢の前へしゃがみこんで言った。

「あとはこつちです。世話になった」

新見は面倒くさそうに言った。

「分かりました」

と歳三は告げて一礼し、平助が苦戦している原田を起こす方へまわった。

新見は常に芹沢と行動を共にしている。しかし歳三は彼から芹沢への尊敬の気持ちを感じていなかった。きっと彼が芹沢一派の中で一番頭が良いのだろうが、新見が芹沢の手下で居るのは地位だけが理由の様な気がした。

野口は芹沢一派の中で一番年若い。そのせいか、少し浮いた感じがする。

歳三たち、試衛館の面々が芹沢たちに出会ったのは今日が初めてだったが、この出会いは後に深く・重要なものになった。

壬生の狼ゝ宴会の後始末ゝ（後書き）

補足説明（2）

・北辰一刀流

千葉周作を流祖とする流派。

・神道無念流

福井平右衛門嘉平を流祖とする流派。

・宝蔵院流

奈良の住僧を流祖とする槍術ヤリの流派。『種田宝蔵院流』は分派。

壬生の狼〜京都へ〜

そもそも、歳三たち試衛館の面々はなぜ京へ来たのか……。

時は1800年の後半。ペリーの率いるアメリカ艦隊が浦賀（今の神奈川県）にやってきた。

そして日米和親条約を結び、日本は鎖国が終わった。その後も日米修好通商条約を結ぶなど幕府の力は弱まり、人々の不満は日々増していた。

不満が増すに連れ、人々は様々な思想を持つようになった。

・ 尊皇攘夷派（天皇中心の世の中を目指し、外国人を排除しようとする考え）

・ 佐幕派（天皇を尊びながらも、幕府中心で尊皇攘夷を目指す考え）

・ 倒幕派（幕府ではなく、新しい体制で尊皇攘夷を实行しようとする考え）

・ 開国派（外国人を受け入れようという考え）

・ 公武合体派（幕府と朝廷が手を結ぶ考え）
など、当時はこれらの思想があった。

そんなある日、山南が近藤に知らせを持ってきた。今から1ヶ月ほど前の事である。

「近藤先生、お話があります」

山南は息を弾ませながら試衛館道場へやってきた。

この日、山南は同門のきよかわはちろう清河八郎の創設した会へ顔を出しに行ったのであった。清河は熱烈な攘夷思想家で、創設した会というのも攘夷をすすめる為の会だった。

いつも通り稽古をしていた食客の面々もその場に居た。

「なんです、山南さん？」

いつも冷静な山南にしては珍しい。自然と皆が山南の周りを取り囲んだ。

「それで？話とはなんですか？」

勇は山南が自分と向き合うように座ったのを見て聞いた。

「先生は、上様（徳川家茂）が近々ご上洛なさるのを知ってますか？」

「ああ……知っていますが、それが何か？」

すると山南は少し興奮気味に続けた。

「その為、幕府は上様のご上洛に先駆けて警固をする者を募集しています。上様のお役にたい者なら身分や年齢を問わないそうです」

横で聞いていた歳三は勇が問う前に山南に質問していた。

「それは確かなのか？」

「はい、私が今日会った清河がその話の責任者ですから間違いありません。將軍上洛に先駆け、京都の治安維持に努める事が目的の場です」

皆の顔が輝やいた。それが本当ならば凄い事だ。貧乏道場の道場

主や門下生にも上様の側で上様をお守りする事ができる……！

「山南さん、私は是非参加したいです！」

同門で山南を慕っている平助は、真っ先に声をあげた。

「それ、参加したら何か出んの？」

寝ころんで聞いていた原田が山南に聞く。

「参加者には、一人50両が支給されるそうですよ」

「ごっ……50両！？なら行くっきゃないだろっ！行く行く！」

原田は急に起き上がって叫んだ。

それを見ていた永倉は、

「現金だな、左之助。私も参加したいと思いますが、先生はどうです？」

と勇に聞いた。

源三郎も、

「私は先生に従いますよ」

と勇を見る。

すると勇は皆の顔を見ながら言った。

「良い話だと思う。上様のお側に居られる機会など、この先もう2度とないかもしれない。どうだ？トシ」

勇は歳三を向く。

歳三は、

「かつちゃんが行きたいってのに、止める理由はねえだろ」

と言って笑った。

「京都は長州などの過激な攘夷派が多いと聞いています。我らの力はきつと必要になりますよ」

山南は皆の反応に安堵し、微笑みながら言った。

「ねえ、山南さん、警固って人を斬るの？」

総司は山南に尋ねた。山南は少し考えて、

「必要に応じてはそうなりますね。でも天然理心流は実践型ですから、役立つと思いますよ」

と答えた。

「なににせよ……」

勇は立ち上がり、皆を見回す。

「俺たちのような者でも上様のお役にたてる日が来たんだ。みんな、ここは是非参加して立派にやり遂げようじゃないか！」

それを聞いて皆も立ち上がり、希望を膨らませた。

こうして、試衛館からは近藤勇など8名が清河の浪士組へ参加したのだった。

壬生の狼〜京都へ〜（後書き）

補足説明。

・当時の1両は現代の4万円に相当。つまり50両とは200万円に値する。

壬生の狼、真の目的と脱退

騒ぎが終わり、歳三は部屋に戻った。部屋は勇と同室だった。

部屋に着くと勇はまだ酔いが覚めていないのか、少し顔色が悪かった。

「つたく、酒が飲めねえくせに寝るほど飲んでんじゃないよ」

歳三は疲れて布団に座り込んだ。

「すまなかった……でも、さすがに断れないじゃないか。今日から共に住むんだし……」

「けっ、俺はあんなのが試衛館に居なくて良かったと思ったよ。どうせ奴も金目当てなんだろ」

歳三がダルそうに言うと、勇は真面目な顔で歳三を見た。

「俺は違うと思う。芹沢さんは俺らと同じ様に上様のお役に立ちたくて浪士組に志願したんだ」

歳三はその表情に怯んだ。……どうして勇は奴の肩を持つ？

歳三がそう思うのには訳があった。京都へ来る途中、芹沢たちとはいざこざがあったからだ。

勇は浪士たちの部屋を確保する”先番宿割”という役目をしていて、その際芹沢の部屋だけ足りなくなるといふ事態が起こった。それに怒った芹沢は、宿泊先の村のど真ん中で焚き火をし、結局勇が謝りその場は収まった。

しかし、歳三はその出来事以来、勇に恥をかかせた芹沢たちを良く思えなかった。だから、勇の気持ちは今ひとつ分からなかった。

「芹沢さんはな、さつき酔いながらも自分の考えを言ってたさ。あの人は国を心配している」

「へっ、口なら何とでも言えるさ。本当に国を思って上様に尽す奴なら他人に迷惑かけるほど酒なんて飲まねえよ」

そう言いながら歳三は横になった。

勇は小さくため息をついて、自分の布団へ横になった。

「京都は物騒な所だと聞いたが、そんな感じは無いな。人も優しいし、飯もうまいし」

「……そう……だな」

歳三は言葉を濁した。勇はそれに気づかず、うとうとはじめた。

歳三は京に近づくにつれて人々が自分達を歓迎していないと感じていた。京の人々は長州びいきだ。その上、將軍警固の為に田舎侍がぞろぞろとやって来ては良い印象は持たないだろう。

歳三は横で寝ている勇を見た。

歳三は浪士組参加にあたって、一つ決意していたことがあった。それは……近藤勇を武士にする事。

勇は今まで百姓の子だとさげすまれてきた。それは道場主になっても変わらず、本人も引け目を感じていたのだった。

しかし、今回は絶好の機会だ。京で活躍して名をあげて幕府の役に立てば……幕臣に取り立ててもらえるかもしれない。武士になれるかもしれない。

歳三はそんな思いを抱き、布団に入った。

次の日、顔を洗いに行ったら山南がいた。

「おはようございます。昨日はあの後、大変だったみたいですね。平助から聞きました」

山南は平助と同室だった。

「まあな。芹沢が一番厄介だった」

歳三は水を汲みながら山南に言う。

「でしようね。……あ、朝食後に清河さんから今後の事について皆に話があるので新徳寺へ集まれとの事です」

「そうか、分かった。じゃあまた後でな」

山南と歳三はそう言って別れた。

新徳寺へ面々が集まると、既に他の浪士たちが集まりつつあった。皆、有名道場の道場主やその門人など、ざっと200人ぐらいの人々がひしめきあっていた。

しばらくすると、清河八郎がやって来た。顔はなにやら誇らしげだ。

「諸君、京までの長旅はご苦労であった。早速だがこれからの事について説明をしたいと思う」

清河は遠くまでよく響く声を出し、話を続けた。

「皆を集めたのは他でもない。浪士組の新しい目的を伝えるためだ」

皆、ざわめきだした。新しい目的……？何を今さら……。

「浪士組とは、尊皇攘夷の先駆けとなるべく結成した集団だ。そのためこの組は幕府ではなく、朝廷のお役に立つために働く。そして浪士組は、江戸へ帰る事になった」

浪士たちは騒ぎだした。

……話が違うではないか！浪士組は上洛する上様をお守りするために結成したはずだ。それでは何の為に自分達は京へ来たのか……。

しかし清河はそんな言葉など無視して、持ってきた筆と巻紙を取り出した。

「これから諸君の名前を、この紙に書いてもらう。私がそれを建白書として朝廷に提出する」

清河はそう言つと、最前列の者に紙と筆を差し出した。

彼は道場主なのだろうか、書こうかどうかを迷っている。そして彼を門人らしき人々が見つめている。

すると清河は意地悪そうな笑みを浮かべ、彼らを見ながら言つた。
「言い忘れたが、名を書かないということは浪士組を脱退することになる。こちらはそれでも構わんが、その場合は金は出さないし諸君はまた、ただの浪士になる……という事だ」

その言葉を聞いた道場主は筆を取りだし、自分の名前を書きだした。様子を見ていた門人たちも名前を書く。

その後も順に名を連ねていき、いよいよ試衛館の番になった。
筆を受け取った勇は、皆に目配せする。

歳三は長年の勘から、勇がこれから何をするつもりか分かった。

「清河殿、よろしいですか？」

勇は立ち上がり、清河を見た。

清河は驚き、皆はざわめきだした。

「私は上様の警固の為に京へ来ました。しかし、やっと着いたと思えば浪士組は尊皇攘夷の為に出来たと申される。それは道理に合わないのでは？」

「ほお、あなたは確か試衛館道場の近藤殿でしたな。ではあなたは京に残り、お一人で上様の警固をすると？」

「一人じゃないぜ」

歳三が立ち上がった。

「我々は京に残り、上様をお守りします」

永倉も立ち上がった。言った。

「試衛館は近藤先生について行きます！」

総司が勢いよく立ち上がる。平助も少し恥ずかしそうに立ち上がった。

「ま、そういう事だよ。清河さん」

原田と源三郎も立ち上がる。

それを見た清河はさらに腹を立てて言った。

「勝手にするが良い！……あなたもですか、山南さん？」

皆ははつとした。山南は清河と同門……という間柄のため、浪士組の話を持ってきた。つまり浪士組を抜ける事は、昔の仲間より今の仲間を選んだ……という事になる。

「山南さん……？」

総司が心配そうに尋ねる。

山南はしばらく考え込んだ。そして立ち上がり、言った。

「清河さん、あなたは我々を騙した。その様な方については行けない。私は浪士組を抜けます」

試衛館の面々は顔を見合わせて喜びあった。山南は試衛館を選んだのだ。

清河はそれが更に気に入らないらしく、声を荒げて言った。

「他に抜きたい者は居ないか！抜けるなら今、出ていってもらおう！」

ざわめいてはいたが他に意思表示をするものは無い。

その時、大きな声が聞こえた。

「俺たちも抜けさせてもらう」

立ち上がったのは芹沢だった。酔っているのか、足元が少しおぼつかない。

「芹沢殿……」

清河はまた驚いた。

「聞いていれば、明らかに筋が通ってるのは近藤殿の方だ。悪いが、俺は正しい方に行く」

「……では、君たち5人も……？」

「脱退だ。文句あるか？」

そう言うつと芹沢は手下を引き連れて出ていった。それを見て試衛館の面々も部屋を後にした。

部屋には悔しそうな清河と他の浪士たちが残った。

結局、浪士組を抜けたのは近藤や芹沢たち13人で、残りの浪士と清河は建白書を提出した後、横浜で異国の襲撃に備える為に江戸へ帰ったが、清河は江戸へ帰還後、幕府の手により暗殺された。

かくして、試衛館8人と芹沢一派5名の13名が京へ残る事になったのだった。

壬生の狼／＼京でのこれから／＼

「……という訳で、他の仲間江戸へと立つのですが、我々は引き続き京と上様の警固の為に残ることになりました」

勇は今、源之丞氏と話をしている。浪士組を離れた事により、自分達だけが京へ残ることになったのだが暫くは八木家の世話にならねばいけない。

「そら、かましまへんが……兄さんだけが残ったとしても大丈夫ですか？」

「はい、確かに幕府の後ろだては無くなりましたが上様と京の平和のためにも我々が決めたことですから……」

そして勇は慌てて付け加える。

「それと、我々にかかった費用は、後で必ずお返し致します。なので暫くは勘弁してもらえないでしょうか？」

すると源之丞は少し笑って、

「分かつとります。兄さんらが落ち着くまではこちらでお世話させて頂くつもりです」

それを聞いて勇はパツと顔を明るくさせ、

「ありがとうございます！このご恩、忘れません！」
と深く頭を下げた。

「しかし、いつまでも八木さんのお世話にはなれませんね……」

山南がため息混じりに言った。

勇たちの部屋へ試衛館の面々は集まり、今後のことを話し合っ

いた。

「でもさ、他にアテはないよね、皆……」

いつも脳天気な原田も深刻な顔だ。

「住むところはまだしも、せめて金はどうにかならないものか……」

勇はうつ向き気味に言う。

その時、山南がある事を思い付いた。

「私たちが浪士組を作り、それを幕府の預かりにしてもらおう……というのはどうでしょうか？」

「それって、どーいう事だよ」

歳三が身をのりだして聞いてきた。

「つまり、我らで清河さんたちとは別の浪士組を作るんです。もし我らが幕府の役に立つ……と分ければ、幕府側が資金などの面で援助して下さることでしょう」

山南の言葉の後で、源三郎が少し不安げに言った。

「しかし、そう上手くはいきますかね？我々はこの人間ではないですし……」

すると山南は、

「京都は長州の尊皇派が過激さを増しています。それに、もし警固の手が間に合っているのだとしたら、我らが江戸から警固に来なくても良いのではないのでしょうか」

「つまり、京では過激な攘夷派に手を焼いている……と言うことですな、山南さん」

永倉が納得したように言う。山南は深くうなずき、近藤を見た。

「どうでしょう、先生」

勇は腕組をして少し考え

「ここは同志の芹沢さんたちも聞こう」

……と、少し弱々しく言った。

「……という話になったんですが、どう思います？ 芹沢さん」

ここは芹沢の部屋だ。他に新見も一緒に話を聞いている。試衛館側は勇の他に、歳三と山南も居た。

「俺はどっちでも構わねえや。幕府の預かりにならなくてもこの家が世話してくれんだろ？」

それをしたくないから幕府に頼むんだよ……！と、その場に居た試衛館の3人は思ったが、必死で押さえた。

「私は賛成です。ただし、浪士組を作るなら、人数は多い方が良いかと」

新見は相変わらずやる気のなさそうな顔をしていたが、意見は的を得ていた。

「何人ぐらい要と思う？」

歳三が新見に聞いた。

「集められるだけ多い方が良いでしょうな。その方が幅広く動けます」

新見はすらすら言う。歳三はなぜか、その姿が気に入らなかった。

「じゃあ、いつそのこと、浪士組の役職を決めようじゃねえか」

歳三は少し挑戦的な態度で新見を見ながら言った。

新見は薄笑いを浮かべ、

「ならば局長は芹沢先生だな。清河に発言されたし」

「それなら、ウチの近藤先生の方が早かった。なるなら近藤先生の方が道理にあう」

いがみあう二人。

その時山南が慌てて言った。

「芹沢先生と近藤先生に、お聞きしてみては？」

その一言で、皆の視線は芹沢にいった。

「俺は局長で良いぜ」

続いて近藤を見る。

「……私は何だって構わない。平隊士でも良い」

その言葉を聞いた新見は勝ち誇ったような顔で

「決まりだな」

と告げた。

歳三は何とか勇を局長にする手段を考えた。

そのとき、不意に山南が声をあげた。

「局長を二人にするのはどうですか？そして、筆頭局長を芹沢先生にしてみらうというのは？」

新見は少し顔を歪めたが、言葉は出なかった。山南の意見は一番中立だ。

「芹沢先生はいかがですか？」

新見が芹沢に尋ねる。

「意義なし」

芹沢はそう言うのと、いきなり立ち上がり部屋の戸を開けた。

「どちらへ？」

山南が尋ねる。

「もう必要な事は決まっただろ。俺はこの辺を見てくるよ」
そう言うって芹沢は部屋から出てしまった。

芹沢が外へ行ったのを確認しながら歳三は

「筆頭局長がアレで良いのかよ」

と、ため息混じりに言った。

外では総司と平助、芹沢一派の野口が談笑していた。

「なら野口さんは私たちと年が変わらないですね」

平助が野口に言った。

「そうですね。でも、沖田さんはお若いのに塾頭でしょう？すごいですよ」

野口は感心したように言う。すると総司は頭をかきながら、

「そんなことはありませんよ。今度、是非手合わせお願いしますね」と言って笑った。

野口と平助も笑った。

生まれも育ちも違う3人は、こうして仲良くなった。

時は3月のはじめ。……まだ春は少し遠いが、暦の上では春。正に出会いの季節であった。

八木家の屋敷を出た芹沢は、門の辺りで大きくのびをした。

すると、向かいの家から女が出てきて玄関先を掃除しはじめた。

不意に、芹沢と女は目があつた。女は会釈する。……立ち振る舞いが、どこか艶っぽい。

芹沢は目をそらし、別の方向を向く。

すると、女の出てきた方から男の声で、

「梅！中におつてくれ！頼むさかい！」と聞こえた。

芹沢がもう一度振り向いた時、女の姿は無かった。

「お梅……か」

芹沢はそう呟き、屋敷に戻った。

やはり春は……出会いの季節。

壬生の狼々京でのこれから（後書き）

いかがでしたか？最後は余韻を残した終わり方でしたが、それぞれの出会いは後々重要になってきます。お楽しみに！（笑）

さて、この小説の終わりを色々考えていましたが、最近ようやく決めました。詳しくは明かせませんが『鬼か仏のどちらかが亡くなる』時が最終回です。……新選組を知る方なら分かるかもしれませんね（苦笑）。最終回が無事に迎えられるように執筆に励みます。それではまた次回、お会い出来ることを願って……。

壬生の狼／会津藩お預かりへ／

結局その後、歳三と新見たちの激しい議論により、13人の役職が決定した。

筆頭局長に芹沢鴨、局長に近藤勇。

副長は土方歳三、新見錦、山南敬助の3人。

副長の手助けをする副長助勤に残りの沖田総司ら7名が付き、平間は勘定方についた。

「……という事です。どなたか質問は？」

山南は役職を記した紙から顔をあげて皆を見渡した。

若い総司や平助、それに原田は、一緒になってワクワクと楽しそうだし（原田は年上だが子どもの様だ）、永倉や源三郎は必死で理解しようとしている。

「でも、どうして近藤先生は筆頭局長じゃないんですか？」

沖田は山南を見ながら聞いた。

山南が苦笑すると横から歳三が、

「いずれは近藤先生が大将だ。目標があつた方が良いだろ」

と総司に怪しげな笑いを浮かべる。

「トシ、俺は別に筆頭局長じゃなくても良いんだよ……」

勇が気弱そうに言つと、歳三は勇を睨みながら、

「道場主が水戸の不良侍に劣つてたまるか。ここまで来たらあんたも上を目指せよ」

と、こづいた。

「んで？これから何をすんのさ？」

原田は身を乗りだして尋ねてきた。

「とりあえずは同士を集めます。今、声をかけているんですが正式に入隊してくれるかどうかは……」

山南は少し残念そうに答えた。

「だから仲間に出来そうな奴には声をかけていくんだ。清河の浪士組はまだ帰っていない。清河に不満がありそうな奴を見つけてどんどん仲間を増やしてくれ」

歳三は言い聞かせるような口調で話した。皆、その後は解散して、部屋には勇と歳三と山南が残った。

「声をかけたって何人だ？反応は？」

歳三は声をひそめて山南に尋ねる。

「一応10名ほど……しかし、快い返事は誰からも聞いていませんね……」

山南はうつむき加減で言う。すると勇は明るい声で、

「まあまあ、二人ともそんなに悩むことないじゃないか。まだ始まったばかりだろ、トシ！山南さん！」

と言いながら歳三と山南の背中を軽く叩いた。

「あのなあ、アンタはもう局長だ。俺のことは土方君と呼べ。トシなんて言うな」

歳三は冷たく言い放つ。

「なんだ……？気に入らんか？……最近お前は俺のことを”かつちゃん”と呼ばんが、それも何か理由があるのか？」

勇は不思議そうに歳三を見る。……なぜ歳三が怒っているのか分からないらしい。

「理由ならさつきから言っているだろ！大将を”かつちゃん”なんて呼べないんだよ！とにかく、俺は近藤さんでアンタは土方君。たった今からそうしてくれ」

勇は府に落ちない様な顔をしつつ、

「分かった」
と答えた。

その後、何人かが仲間に加わり、結果的に勇や芹沢らを含む23人の浪士たちが京に残る事になった。

会津藩の藩主・松平容保は京都の守護職も兼任していた。まっだら かたもり

「殿、よろしいでしょうか？」

会津藩の家臣へ手紙を書いていた容保は手を止めて、声の方を向いた。

「なにごとだ？」

すると声をかけた老中は、

「お話していた者たちが参りました」

と、少し飽きれ気味に言った。容保は老中と対照的に嬉しそうな顔をして、

「左様か、ならば広間に通せ。私も直ぐに参る」

と、明るい声で言い、すぐさま部屋を出た。

「誠にあの様な者たちを会津藩お預かりになさるのですか？」

はや歩きで広間へ向かう容保に追いつき、少し息の上がつている老中は尋ねた。

「今さら何を言うか。あの者たちは幕府に尽そうと遥々こちらへやって来て、例の清河に騙されたそうではないか。それではあまりにも哀れだ。それに、これは幕府からの指示でもある」

容保は真剣な表情で反論する。

「しかし、本当に信用しても良いものか……かえって会津藩の質を落としてしまうのではないだろうか……」

老中は溜め息混じりに言った。

「だから今から直々に会うのではないか。じいは心配症だのう」

容保は再び歩き出す。

「そんな事はございませぬ。当然の心配です」
老中は憤慨したように言った。容保はそんな老中を横目に、広間に入っていった。

部屋には、平伏した2人の男が居た。

「苦しゅうない。おもて面をあげよ」

容保の声に従い、2人は顔をあげた。その時容保は、初めて近藤勇と芹沢鴨の顔を見た。

2人ともやる気に満ち溢れた、良い顔をしているではないか。やはり、じいの取り越し苦労じゃ。

「近藤、芹沢、頼んだ」

容保は一言そういうと、部屋を立ち去った。勇と芹沢は、
「はっ！！」

と、去っていく容保に向かってもう一度平伏したのであった。

勇たちと別れ、じいをかわし、ようやく一人になれた容保は部屋に戻るなり、

「斎藤」

と呟いた。

「お呼びでしょうか？」

何処からか、1人の男が現れた。すると容保は、

「先程、例の浪士組を会津藩のお預かりにした。私は、あの者たちは信頼できると思っているが、じいがうるさくてな……」

と言いながら頭をかく。すると斎藤と呼ばれた男は、
「私にその浪士組に入れという事ですね？」

と、淡々と言う。

「そうなのじゃ。そなたの事は私も、じいも信用しておる。じいは、斎藤が入隊するのなら会津藩のお預かりを許す……とまで言うておる」

容保は溜め息混じりに言い、斎藤に近寄った。

「そなたにしか出来ない事じゃ。浪士組の動きを私に伝え、もしも良くない方へ向かっていたらば、そなたが正しい方へ導いてやってくれ」

すると斎藤は、

「承知致しました」

と告げ、立ち去ろうと戸を開けた。

「斎藤、そちに託したぞ」

去る斎藤に容保が言うつと、彼は大きく頷いて部屋を後にした。

こうして、浪士組は正式に会津藩お預かりとなり、それ以後彼等は”壬生浪士組”と名乗る様になった。

そしてその翌日さいとう斎藤一はじめという若い男を仲間にするのだった。

壬生の狼女

今日は宴会だ。

勇たち壬生浪士組が無事に会津藩のお預かりになったからだ。これで彼らはただの浪士ではなくなったのだ。

宴会は、今日は八木家ではなく”椿屋”という店で行った。椿屋は島原にある。島原は花街……つまり遊女屋が立ち並ぶ所であり、京都で一際賑わう場所でもあった。

山南敬助は憂鬱だった。彼は女が苦手だからだ。しかし、島原に来た以上今夜は皆朝帰りだろう。

「センセ、おつぎします」

山南の右に座っている女が酒の入った徳利ちくりを持ち上げながら山南に言う。

「はい、かたじけない」

山南は慌てて、お猪口を差し出し、つがれた酒を飲む。

彼は宴会も酒も嫌いではない。しかし、女が居ると何故か調子が狂う。

ふと、向かい側を見る。土方歳三だ。彼は酒を飲まずに不機嫌そうにしている。女が話しかけても適当に答えているだけだ。

前の方では芹沢と勇が居る。二人とも女が二人ずつ居るが、芹沢は酒をばかり飲んでいりし勇は女との話が盛り上がっている様だ。

原田や永倉たちは、一足先に床についたらしい。しかも、源三郎も姿が見えない。……少し意外だが、彼も女と楽しそうにしていた

し、今はもう……。

「山南さーん、どうしたんですか？浮かない顔して」

話しかけてきたのは総司だ。後ろには平助と芹沢派の野口も居る。

「総司……いや、別に浮かない顔なんて……」

山南がブツブツ言っていると沖田はため息混じりに、

「まったく、こんな綺麗な方がお相手なんだから、もっと楽しんで下さいね」

と、山南の隣の女に笑いかけながら言った。女は少し頬を染めて、
「おおきに」

と総司に頭を下げた。

すると今度は後ろの方から平助が顔をだし、山南に

「私たちはそろそろ帰ります」

と告げた。

「もう帰るのかい？」

山南は羨ましいと内思いながら聞き返す。

「はい、私たちはロクにお酒も飲めませんし……先に帰らせてもらいます。先生方はゆっくりして下さい」

平助は総司に負けないぐらいの笑顔で言った。山南も副長でなければ帰れたかもしれないが、局長より先には立場上帰れない。だから沖田たちには、

「そうか、気を付けて」

と言っただけで精一杯だった。

沖田たちが帰ると、他の者も解散し始めた。ほとんどが床へ向かうが、何人かは八木邸へ帰っている。

「自分もそろそろ帰ります」

そう言つて山南は声をかけられた。

「斎藤君……君もかい？」

山南に声をかけたのは、最近入隊した斎藤一だった。今日の宴会は、斎藤の歓迎会も兼ねている。

「はい、結構飲んだので帰ります。ありがとうございました」

結構飲んだにしては顔に出てなかったが、山南は彼にも

「お疲れ様」

と言うしかなかった。

とうとう勇や歳三まで部屋から出ていつてしまった。山南も、そろそろ覚悟を決めねばならない。

そのとき、横から

「センセ、どないしします？」

と女が尋ねる。山南は少し考えてから、

「……行きましょうか」

と答えた。

女は頭を下げ、

「おおきに。部屋はこつちどす」

と山南を案内した。

案内された部屋は普通よりも少し広めで、部屋の中央に布団と枕が二つずつあった。

山南は取りあえず片方の布団の上に座る。しかし、今彼は途方に暮れていた。本当は、この場を離れてしまいたかった。

その時、女が意外な事を言った。

「センセは、無理してはるんやないですか？」

山南が驚いて顔を上げると女は宴会の時よりも穏やかに笑っていた。

「無理……？」

山南は女に聞き返した。

「宴会の時から暗い顔してはりますし、今もどこか辛そうに見えます」

……そんなにあからさまだったか……。

山南は申し訳なく思い、

「すいませんでした……気を悪くさせてしまいましたね……」

と頭を下げた。

すると今度は女が慌てて、

「そんな事ありまへん。どうか頭を上げて下さい。それにセンセミたいなお客はんも、よういらっしゃいますし……」

と山南に言った。

「居るんですか？……私みたいなのが……」 山南が聞き返すと、

女は少し笑いながら、

「へえ、おられますよ。でも、そういう方は優しい方ばかりなんですわ」

と山南を見た。

山南と女は目があり、笑いあった。

なぜだろう、この女は……今まで出会った女とは違う。暖かくて優しい何かを感じる……。

「あなたは不思議な方だ……」

山南は、まだ少し笑いながら言った。

「ウチがどすか？」

女は意外そうに聞く。

「私は今まで色々な女の人と出会いましたが、あなたの様な人は居なかった。……あなたに早く出会えたら、私も女の人が苦手にならずに済んだかもしれない……」

山南は少し寂しそうに微笑んで言った。

「センセは、女が苦手なんですか……せやかて、ウチに出会ってな

くても……」

女が少し照れながら言うと、

「いや、あなたに出会っていたかった」

と、山南は真顔で告げた。

「……いややわ、センス……そんな真面目に言わんでも……」

女はさつきよりも顔を赤くして山南から目を反らした。

山南は段々と、自分の言った言葉が恥ずかしくなってきた、顔を下げた。

……気まずい沈黙……。山南はそれに耐えられなくなり、女に尋ねた。

「まだ、お名前を聞いていませんね。教えていただけませんか？」

すると女は手をつき、頭を下げながら

「椿屋の天神・明里てんじん あけさとどす」

と答えた。

「明里……美しい名前ですね。私は山南敬助です」

そう言って山南は明里に微笑んだ。

明里も笑った。

山南にとってこの日は、忘れられないものになったのだった。

壬生の狼く帰り道く

結局その後、山南は明里とお互いの話を少ししてから帰った。

店を出た山南は、不思議な気分だった。今まで遊女屋へは何回か行ったことはあるが、明里の様な女には出会ったことがなかった。

明里の事を、もっと知りたい。

明里の声を聞きたい。

笑顔に会いたい。

その時、後ろから声をかけられた。

「山南さん」

振り返ると……そこには、歳三が居た。

「土方君……君も今帰りかい？」

山南が尋ねると、歳三は相変わらずうつとおしそくに、

「まあな。そつちもだろ？」

と言いながら欠伸をした。

「……ああ。そういえば相手は天神って言っていたな……天神ってのは、何かの位かい？」

山南は歳三に聞いてみた。歳三は女好きで江戸に居た頃から近所では有名だった。遊里にも詳しいから島原についても知っているかもしれないと思い、聞いたのだった。

すると歳三は驚いて山南に聞き返した。

「天神？本当に天神って言ったのか？」

歳三の驚き方に戸惑いながらも、山南は

「あ……ああ。何か悪かったかな？」

と気弱そくに聞いた。

すると歳三は信じられないという表情をし、山南に言った。

「天神つてのは、島原で太夫たゆうの次に上等な女の事だ。俺はもつと低い方の女だったのに……」

歳三は少し機嫌を損ねたようにうつ向いた。山南は申し訳なさそうにしながらも明里との事を思い出し、その事に納得していた。

「んで？どんな女だった？いい女だったろう？」

歳三は、先程と表情を変えて聞いてきた。

「そうですね……笑った顔が印象的な人でした。自分の故郷の話をしたり、彼女の故郷の事も少し……」

山南が言つと、歳三は途中で話を遮った。

「ちよつと待て、まさか話してただけじゃねえよな？」

山南はキョトンとして聞き返した。

「はあ……話しかしていませんが何か問題でも？」

すると歳三は呆れた様に、

「信じられねえ。遊里に行つて……男のする事じゃねえよ……」

とぼやく。

「そんなものかな……私はそれでも十分満足してるし、良かったと思うが……」

山南はポツリと呟く。

「ま、いいさ。そんな事は人それぞれだ。俺は他人の事にまでしつこく言わねえよ」

歳三は頭の後ろで手を組ながら言った。山南は少し苦笑いして並んで歩く。

「ところでよお……」 歳三が不意に山南に声をかけた。山南は不思議そうに顔を歳三に向けた。

「さっき帰るとき、店の奥の方で女たちが何て言つてたと思う？」

歳三は寂しげな表情を浮かべた。山南はその顔が気になり、
「何か言ってたのかい？」

と歳三に聞く。すると歳三は立ち止まり、遠くの方を見ながら呟いた。

「壬生の狼……壬生狼みぶろって言ってたんだ」

……壬生狼……意味は分らないが、良いことではないのは確かだ。

「壬生狼って……どういう意味ですか？」

山南が尋ねると歳三は悔しそうに言った。

「幕府が手に負えずに壬生へよこした人斬り狼……だから壬生狼だよ」

山南は信じられなかった。確かに京の人々は歓迎していないと感じてはいたが、ここまでだったとは……。

「島原でこの噂では……市中じゃどんな風に言われてるものか……」
歳三の寂しい顔を、山南は初めて見た気がする……。

朝日が昇る。

今の二人の気持ちを嘲笑うかのように輝く朝日……。

「俺たちは、人を斬りに京へ来たんじゃないやねえ。自分たちの誠を示す為に……幕府の役に立つために来たんだよ……」

歳三は眩しい位の朝日を見つめて呟いた。

「全く、あなたらしくありませんねえ」

山南はいたたまれなくなり、大袈裟に大きな声を出してみた。歳三は少し意外そうな顔をして、山南の方を見る。

「狼だなんて、まだ本格的に活動してもいないうちから中々呼ばれ

ませんよ。かえって名誉な事です」

分かっている。

彼は……土方歳三は……近藤勇の事を思っているから憂えているだ。勇の出世に差し支えるかもしれない、この噂を。

「我等は確かに狼かもしれませんが。いや、最近の武士は皆そうだ。でもね、土方君」

山南は朝日に背を向け、歳三の前に立って続けた。

「我等はただ狼ではない。他の荒れ狂う狼を成敗する、誇り高き狼だ。壬生浪士組はそんな風になれば良いんだよ」

山南が言うと、歳三は少し笑って、

「確かにそうだな……壬生狼でもいいか。俺たちは誠の狼だ。長州みたいな暴れ狼と一緒にされてたまるかっ！」
と言い、歩き出した。

山南は自分よりも少し早い歩みの彼の後ろ姿を少し見つめ、自分も小走りで彼に追い付き、二人は並んで八木邸へと戻ったのだった。

浅葱色の誠く綻び（ほころび）

八木邸へ帰った二人は、中が騒がしい事に気がついた。歳三と山南が不思議に思っていると、二人を見掛けた平助が飛んできた。

「土方さん、山南さん、何やってるんですかつ！こんな一大事にっ！」

青ざめた顔で平助が二人に言う。

「島原から今帰って来たところです。……一体何が……？」

山南が少し気弱そうに尋ねると、平助は少し間を置いて高ぶる気持ちを抑えながらゆっくりと言いだした。

「実はつい先程、会津公の使いの方が来られました。今日の正午、会津公が我々の試合の謁見をしたいので準備をして本陣に参れとの事です」

言いきった平助はぐったりと肩を落とした。

「土方君、これは本当に一大事だ……」

山南は腕を組んでうつ向いた。

つまり、会津公は壬生浪士組の技量をこの目で確かめるために彼等を本陣に招いて試合をさせようというのだ。

しかし、昨日の宴会のせいで会津公に見せられるような試合が出る者は少ない。

「平助、今すぐにでも向かえる者はどれだけ居る？」

歳三は何かを閃いた様な顔で平助に尋ねる。

「えっと……今のところは私と沖田さんと斎藤さんです……」

歳三は頷き、笑った。それは何かとんでもないことを企む鬼の顔だった。

「平助、この事を急いで近藤さんに伝える。あの人ならどんなに酔ってても飛び起きるさ」すると平助は納得した顔をし、

「分かりました。では芹沢先生たちも起こし……」

と言いかけたところで歳三が口を挟んだ。

「違う。起こすのは近藤さんだけだ。他のはいらない」

その言葉に平助も山南も驚いた。

「……土方君……もしや君は……」

山南が歳三を見て言うと、

「そつだよ。これは絶好の機会だ。酔っぱらった芹沢たちが行くより、試衛館の面々で行って会津公に顔を売つとくのさ。そうすれば色々と有利だ」

と、なにくわぬ顔で言う。

「良いんですか？筆頭局長が居ないのに本陣に行つては失礼なんでは……」

平助は心配そうに尋ねる。

その時、後ろから聞き覚えのある声がした。

「どうしたんですか？朝っぱらから……」

それは島原から帰ってきた永倉だった。しかし、いつも一緒に居る原田の姿が無い。

「左之助はどうしたんだい？」

山南に聞かれると、永倉は少し決まりが悪そうな顔をして

「左之助は二日酔いが酷いんで良くなったら戻ってくるみたいです」と言った。

「つたく、左之助の奴……」

歳三は悪態をついたが、急に永倉の方を向いた。

「新八、お前も来てくれっ！」

歳三の言葉にイマイチ状況が把握出来ない永倉。

「どつ……どういふことですか……」

そんな永倉に山南が、かいつまんで話すと永倉は納得したような顔で、

「承知しました」

と言った。

「よしつ、これで6人だ。3試合は出来る。平助、急いで近藤さん
を呼びに行ってくれ」

歳三に言われ、平助は急いで八木邸を出た。平助を見送った3人は素振りでもしようと引き返すと、戸口で腕くみをしている男がいた。

「……新見さん……」

山南が言う。歳三は嫌悪感がむきだしだった。

「何を騒いでいるのかと思えば、そういうことでしたか」

新見は意地悪そうな顔で3人を見回す。

「悪いが、もう話はついた。あんたらの出番はねえよ」

歳三が言つと、新見は更に意地悪そうな顔をして、

「いいえ。ウチからも2人出させてもらいます。平山、佐伯！」

と声をかけると、芹沢派の平山と佐伯がやってきた。

「芹沢先生は二日酔いで行けないが、この二人は昨日酒を飲んでいない。試合は出来る」

と3人を見ながら言った。

歳三は考えたが、何も思い付かないので、

「分かったよ。そのかわり近藤さんは連れていくぞ」

と言つと、新見は薄笑いで

「結構です」

と言いつ残し、平山たちと去っていった。

「まさか新見さんが居たとは……」

永倉がため息混じりに言う。

「落ち込んだってしょうがないさ。ほら、素振りに行こう！」

山南が歳三と永倉に言うと、3人は総司たちの所へ向かった。

この日は紅白に分かれて試合をした。会津公・松平容保は試合に満足し、壬生浪士組を將軍（上様）が下坂（大坂へ行くこと）の際に会津藩と共に警護をするようにと命じたのだった。

そしてその夜、勇たちは帰ると八木邸で酒を飲みながら警護を命じられた事を喜びあった。

「いやあ、やはり会津公は素晴らしいお方だ！俺は感動したさ！」

勇はいつになく上機嫌で、珍しく自分から酒を飲んでいる。会津公に認められたのがそれほど嬉しかったのだろう。

「なあ、新八は見たんだろ？会津公ってどんなお方だった？」

原田が永倉に聞いた。

「お若いがいっしょに話したお方だったよ」

永倉が酒を飲みながら言った。

「良いなあ。俺らも知ってれば行ったよな、源さん！」

原田が井上に話かけると、

「そうですなあ。お目にかかりたいです」と言った。

「やはり会津公の様なお気持ちを皆が持たねば、本当の攘夷は難しいだろう」

勇はまだ一人で語っている。その時、隣ですつと酒を飲んでいた芹沢は耐えきれなくなり叫んだ。

「さっきからうるせえなあ！近藤、お前は会津公をお守りする為に

来たのか？」

芹沢に睨まれ、勇は少し怯んだが、

「会津公をお守りする事は、幕府をお守りする事になると思います
が……」

と力強く言った。

「大体、会津藩のお預かりなんだから俺らが一緒に警護するなんて
当たり前じゃねえか！ いちいち騒ぎ立てる事じゃねえよ！」

そう言うつと芹沢は膳を引っくり返して自分の部屋へ戻った。

歳三は勇の近くへ行こうとしたとき、隣に座っていた新見が歳三
に向かって言った。

「あんたの頭は有頂天になりすぎだ。ただでさえ芹沢先生は尊皇派
で今日も参加出来なかったというのに……」

すると歳三はキツ新見をと睨み、

「そんなのあんたらの問題だ」

と言って勇に駆け寄った。

この日から、壬生浪士組は近藤派と芹沢派にはつきりと分かれた
のだった……。

浅葱色の誠く新たな亀裂く

ところで、この頃の壬生浪士組は”近藤派”・”芹沢派”以外に”殿内&家里派”も存在した。

”殿内&家里派”は、江戸から来た浪士組で芹沢や近藤たち13人が新しい浪士組を作る際に入隊した他の浪士たちを差す。ちなみに、後に入隊した齊藤一や芹沢と交流があり入隊した粕谷新五郎、病気の為江戸へ帰れなかった阿比留鋭三郎、京都で仲間になった佐伯又三郎らは該当しない。

つまり、幕府に申請した24人のうち”近藤派”・”芹沢派”+4人以外の7人は”殿内&家里派”という事になるのだ。

「くそっ！もう我慢ならねえ！」

握った拳を畳に叩きつけ、若い男が悔しそうにしている。

「静かにしろ、家里。気持ちは分かるが、あまり騒ぐと誰か来るぞ」
もう一人の男が声をひそめながら言う。

家里と呼ばれた方は家里次郎で、もう一人は殿内義雄だ。

「これが大人しくしてられるか！近藤も芹沢もいい気になりやがって……！」

家里が腹を立てているのは、先日行われた將軍への試合謁見に付いてだ。彼らは誰も呼ばれなかったのだ。

「近藤たちや芹沢たちは参加したというのに、俺らは話すら知らなかった。これでも同志か」

すると殿内はため息混じりに言う。

「仕方ない。俺は自己流だし、お前は目録すら貰ってない。それな

ら免許皆伝者や道場主が行くのが正しいだろう」

他も、年寄りだったり名もない道場出身という者ばかり。会津公の前で恥をかくだけだろう。殿内はそう割りきっていた。

「……俺は……アンタの様に考えられねえ。俺は……」ココを辞める」
家里が立ち上がると殿内は慌てたような口調で言った。

「正気か。我々は佐々木様より言いつかった役目があるではないか！」

佐々木とは、江戸の浪士組を率いてきた幹部の一人・佐々木只三郎である。殿内らは佐々木から壬生浪士組の動向を報告する様に命じられていたのだ。

「しかし、俺は我慢ならねえんだよ……」

家里は声を震わせながら言った。目録も貰えなかった彼の事だ。きつと劣等感を人一倍感じやすいのだろう。しかも殿内よりも10歳近く若い。尚更、惨めに感じているんだろう。

「家里、そう落ち込むな。俺らは近藤たちより先に幕府から命を受けたじゃないか」

すると家里は顔を上げ、

「我々の方が先に？」

と尋ねる。すると殿内は少し笑って、

「そうだ、佐々木様は幕臣。幕府のお方なのだ。佐々木様の命は幕府の命だ」

と言いながら家里の肩をポンツと叩いた。家里は少し鼻声になりながら、

「……はい」

と言い、殿内に頭を下げた。

「ふあゝ………今日も良い天気だなあ」

総司が欠伸をしながら井戸へ顔を洗いに行く。

「そんな所を土方さんに見られたらまた怒られますよ！」

平助は苦笑しながら顔を洗う。

「総司！情けねえ声出すなっ！」てね」

野口も顔を拭きながら笑った。

「ひどいなあ〜！それではまるで、土方さんは何時も私を怒ってるみたいじゃないですか！」

総司が頬を膨らませながら言うと、平助と野口は口をそろえて、
「怒ってます！」

と言った。

総司がむくれていると、奥の方から男が出てきた。佐伯又三郎だった。

「ああ、皆さん、おはようございます」

佐伯は京なまりで挨拶をすると、水を汲み出した。

「佐伯さんは商家の方でしたよね？」

総司が何気無く聞いた。佐伯は京都で仲間になった者で、先日の試合謁見に芹沢派として参加していた。

「へえ、確かに家は質屋どす。それが何か……」

困惑する佐伯。すると総司は慌てて、

「いや、別に変な意味はないんです！ただ質屋の息子さんにしては剣がお上手だったんで何故かと思ったんです！」

と答えた。すると佐伯はクスツと笑い、

「そのことですか。実は小さい頃から剣を習おとったんですわ」

と言った。するとそれを聞いていた野口が、

「そうだったんですか！珍しいですね」

と話に入ってきた。

「自慢じゃありませんが、寺子屋に通おとった中で一番剣ができてました」

佐伯は照れ笑いしながら野口を見た。

「せやからこの浪士組の話聞いたとき、今しか無い思っただんどす。わいは三男やから家継がんし、一人旅でもしようかと思っただんどす。いやから……」 佐伯はこう続けた。

農民の子は農民、武士の子は武士になるのが当たり前というこの時代、商家の子は武士にはなれなかった。そんな時に壬生浪士組の募集を知った。佐伯の喜びは、はかりしれない。

「壬生浪士組は入隊するのに身分はこだわらん。近藤先生は農民の出やのに、鍬やのうて刀を持っただんどす。嬉しかったですわあ。皆は怖がっても、わいは嬉しかったんどす！」

佐伯は目を生き生きとさせる。

「近藤先生は、身分の苦しみを一番知った方だから……」
平助がしんみりと言う。

佐伯は芹沢派寄りな立場だったが、近藤の事も尊敬していたのだ。つた。

佐伯は朝食を済ませて部屋へ戻った。家から持ってきた荷物を見て、ふと家族を思い出していた。

そのとき、障子の向こうから声がした。

「佐伯さん、話があるのですが良いですか？」

障子を見ると、人影がうつつていてる。

「へえ、どうぞ」

佐伯が声をかけると、障子が開いて若い男が立っていた。男は家里だった。

「家里はん、どないされました？」

すると家里は神妙な面持ちで佐伯の前に座った。

「家里はん……？」

佐伯は不思議に思つて呼びかけると、家里は暗めな声で

「お願いがあります」

と告げ、続けて

「我等の仲間になつてくれませんか、佐伯さん」

と言つた。

「なに言つてはりますの、わてらは壬生浪士組の仲間ですやろ？」

佐伯は家里の言う意味が分からず聞き返した。

「あなたはこちらで仲間になった。なら近藤先生や芹沢先生とも親しくはないのでしょうか？」

家里は表情を変えずに言つた。

「そらそうです。せやけど偉い方たちやと思いますよ」

佐伯は困惑する。

すると家里は身を乗り出しながら、

「佐伯さん、ここだけの話なんですが、私と殿内さんは幕府から直々に壬生浪士組の目付け役を頼まれているんです」

と言つた。家里は最後まで言おうかどうか迷つたが、佐伯を説得する為ならやむ終えなかつた。

「ばつ、幕府から?!」

佐伯の反応を見て家里は手応えを感じた。

「そうです。我等の働きが幕府に認められれば、いずれこの壬生浪士組は我等の物になるでしょう。どうです？悪い話ではありませんよ」

佐伯は少し考え、

「家里はんは、わてに何をさせたいんです？」
と聞いた。

「目付け役の仕事を手伝つたり、きっと我等の中では、あなたが一番剣が達者だから斬り込み隊長などをしていただきたいのです！」

家里は必死に言つた。それを聞いた佐伯は、

「……考えてみます」

と言った。家里は顔をやつと明るくして、

「良い返事を期待してますね」

と言って出ていった。

しかし、佐伯が考えているのは家里と正反対の事だと、家里は知るよしも無かった。

浅葱色の誠／新たな亀裂／（後書き）

補足説明

家里、殿内、佐伯は出身など資料に詳しく載っていなかったなので全て設定はオリジナルです。ご了承下さい。

浅葱色の誠く露見く

「そうか……まさか殿内さんたちが目付け役を任されていたなんて想像もしていなかった……」

勇は腕組をして、どうしたら良いか考えていた。

「どうするもこうするも、本人たちから事情を聞かないといけませんよ……」

勇の隣の山南はこう主張する。

「ま、事情によっては脱退だ。壬生浪士組を乗っとりつとしてる時点で許せないけどな」

歳三はあぐらをかき、頬杖をつきながら言う。3人より少し奥の方で、佐伯が身を縮めている。

そう、佐伯は家里に誘われたと勇たちに相談したのだ。彼は初めから仲間になる気は無かったのだが、彼等が目付け役だったということは聞いたことがなかったので本当かどうかを確認するためだ。

「すんまへん……わて、余計な事言ってしもうて……」

佐伯は肩身が狭そうに、うつ向いた。すると山南は、

「とんでもない！我々は知らなかった事なので、かえって助かりましたよ」

と慌てて言った。

「ま、何にせよ、事実確認が必要だな」

勇がそう言った時、いきなり障子が開いた。障子が真後ろにあった佐伯は驚いて飛び上がる。

「よお、近藤。そりゃあ甘いんじゃないか？」

そこに居たのは芹沢だった。右手には愛用の鉄扇を持ち、仁王立ちして勇を睨んでいた。

「芹沢先生……」

歳三は怪訝そうな顔をしながら呟いた。

「殿内たちが俺らの目付け役だあ？笑わせんな。アイツらみんな三流浪士じゃねえか。それに、江戸に帰った腰抜け共は幕府の人間なんかじゃねえよ。そんな奴らの命令なんぞ知るか！」

まだ昼間だが、酒を飲んでいるのだろうか……芹沢は顔を赤くして怒鳴った。

勇は反論しようとしたが芹沢は

「天誅だ！裏切り者は皆肅正だ！」

と怒鳴り散らしながら部屋から出ていった。

……実は、この芹沢の言葉を恐れた者がいた。他ならぬ、殿内と家里だった。彼等は芹沢の声を聞き、事の次第を知ったのだった。

「家里！お前、とんでもないことを……」

殿内は声を潜めながらも怒って家里を見た。

「申し訳ありません……まさか佐伯が芹沢たちに話すとは思っていませんでした……」

家里は体を小さくして殿内と目を合わせずに下の方を向いていた。「違う！そうではない！何故佐伯を誘わなければいけなかったのだと言っているんだ！」

殿内は家里の肩を掴み、自分の方を向かせた。家里は殿内の迫力に恐怖を感じつつも、

「我らの今後を考えて……剣の腕がたつ者が居れば、何かと便利だと思っただんです……」

と話した。殿内は呆れたように、

「佐伯は先日の試合のとき、参加していただろう。ならば近藤か芹沢のどちらかと繋がりがあるとは考えなかったか？」

と言った。家里はハッと気づき、

「申し訳ありませんでした！」

を繰り返した。

殿内はそんな家里を見てため息をつきながら座りこんだ。

「これからどうしようなあ……芹沢のあの様子では、穏便に解決はしないだろう……」

殿内は対策を考えていた。目付け役を言われていたのは自分達2人だから、他の者に迷惑はかからないだろう。

殿内はふと家里を見た。昨日、腹を立てていた時とは別人の様に震えている。殿内は、この家里という男を自分の弟の様に思っていた。年が離れているからかもしれないが、とにかくほっとけないのだ。

……仕方ないなあ……。

殿内は家里に近づき、そっと呟いた。

「家里、お前は確か大坂に親類が居たな」

突然殿内に尋ねられ、家里は首を傾げながらも

「はい……母の兄上が居ます……それが？」

殿内は家里を見ながら力強く言った。

「大坂へ行け。今すぐここから立ち去るのだ」

家里は目を丸くし、反論した。

「そんな……殿内さんは？ならば殿内さんも一緒に逃げましょう！」

「家里、私はな、何も思い残すことは無い。正直、ご公義など……わからない」

殿内は穏やかな顔をしていた。多分彼は、もう心に決めたのだらう。

「……殿内さん……」

家里は今にも泣き出しそうな顔で殿内を見た。

「そんな顔するな。お前は俺よりも若いし志も高い。俺は死ぬかもしれないが、それならそれで本望さ。お前は大阪で強く生きて行け。俺のかわりに生きるんだ」

殿内は優しいまなざしを家里に向け、笑顔になった。

二人の男は声を出さないで暫く泣いていた……。

皆が異変に気付いたのは日が傾いてきた頃。結局勇らで話し合った結果、事実を確かめ、脱退も視野に入れて話をするという結論になった。

しかし勇、歳三、山南が殿内の部屋を訪ねると中はもぬけの空で、家里も姿を消していた。そして、殿内の文机ふつくえには、達筆な字で”果たし状”と書かれた手紙が置いてあるだけだった……。

浅葱色の誠〜最初の犠牲者〜（前書き）

更新がかなり遅くなって本当にすいませんでした。待っていていました方、ごめんなさいです。そして、今回は少し長めです。

浅葱色の誠く最初の犠牲者く

『本日の子ノ刻、四条橋で待つ。

殿内 義雄』

殿内の机の上にあつた果たし状には、こう記されていた。

「家里さんも見あたりません！2人とも身のまわりの物が無くなつていました！」

血相を変えて勇の部屋に飛込んできた平助の報告を受け、歳三と山南は勇の部屋に集まつた。

「ちくしょう、こつちは穩便にしようと思つてたのに……」

歳三は悔しそうに言つた。山南も険しい顔をしながら、

「こつなつたら約束の時間に趣き、事情を聞くしかないでしょうね……」

と言ふ。しかし歳三は

「何言つてんだよ！奴らは闘う氣だ。話し合いで解決出来るなら果たし状なんざ作らねえさ。こつなつたら斬るしかねえよ！」

と山南に反論した。

山南はふと、勇を見た。彼はさつきから、腕組をし、じつと畳の一点だけを見ている。

「近藤先生、先生はどうお考えです？」

山南は勇に尋ねた。歳三も勇を見た。

勇は更に少し考え、寂しそふな声で言つた。

「殿内君も、家里君も、出来ることなら斬らないでくれ」

山南と歳三は思わず顔を見合わせた。二人とも、勇はきつと殿内
たちを許さず歳三の意見に従うと思っていたからだ。

「何でだよ？じゃあ、奴らが命乞いしてきたらまた浪士組に戻せ
て事か？」

歳三は不機嫌そうに言った。

「その通りだ。その場合は何も無かった事にする」

勇は何の迷いもなく言った。

「本当にそれでいいんですね？」

山南が尋ねる。

すると勇は立ち上がり、障子を開けた。外はもう夕方だ。庭にあ
る池の水面には、朱色に染まっている。

「俺はな、寂しいんだよ」

勇はポツリと呟き、言葉が続けた。

「折角、上様の警固が出来ると勇んで江戸から京に来た。なのに騙
されていた……」

勇は朱色の水面を見ながら言った。

「それでも、自分の思いを貫く為に京に残り、壬生浪士組を作った」

勇がそこまで言うとき歳三はもどかしそうに、

「だがからこそ、隊を良くする為に奴らを成敗するんだ！」

と少し声を荒げて言った。山南は二人を交互に見る。

すると勇は、先程よりも厳しい口調で

「だからこそ許すんだ。ここまで苦労して作った組だ。一番初めに
斬るのは仲間ではない、不逞浪士だ！」

と歳三に言う。

歳三は反論出来なくなり、下を向いた。

「思い入れが強いからこそ、あえて仲間を厳しくする事もあると思いますか」

山南が勇に語りかける。歳三は不思議そうな顔をして山南を見た。

「全く、あなたはどちらなんですか……」

勇は山南の顔を見ながら苦笑するが、また直ぐに真顔になる。

「土方君、総司と平助、あと斎藤君に、時間になったら四条橋に行くように命じてくれ」

勇は歳三を見てハッキリと言った。

「総司に平助に斎藤？何故だ、だったら俺か山南が……」

歳三は反論しようとしたが、途中で勇は遮った。

「お前も、山南さんも、隙があれば彼らを斬り捨てる気だろう」と、弱々しく笑って部屋を立ち去った。

冗談じゃない。何故、浪士組での初仕事が内部争いの処理なんだ。

斎藤一は、外側で無表情を装いつつも内側では不満をぶつけていた。

自分は容保から浪士組を正しい道に導く様にと派遣されたが、実際はその様な力はない。浪士とはいえ、壬生浪士組の連中はそれなりに皆腕がたつ。殿内らが佐々木と通じていてこれでは、自分が松平容保に目付け役を命じられていると知られたら……暗殺されるかもしれない。

しかしその浪士組は今、仲間内の事で揉め、脱走した同志から果たし状が来る有り様。

殿に何と報告するか……

「斎藤さん？具合でも悪いんですか？」

斎藤は頭の中で色々と考えを張り巡らせていたが、総司の声で我にかえった。

「いえ、少し考え事を……」

とつさに斎藤が言うつと、その横で平助はため息をついた。

「なんだよ、陰気くさいなあ……」

総司が言うつと、平助は沈んだ声で

「陰気くさくもなります。何故私たちがこんな役目を……。それより、沖田さんは何とも思わないんですか？」

とブツブツ言いながら尋ねた。

「何が？」

平助の質問の意味が分からず、聞き返す総司。

「何がって……この3人になった理由ですよ。僕ら以外にも、永倉さんとか原田さんとか居たのに……」

平助はまだ少し不満そうに言った。

それは斎藤も気になっていた。自分と平助は隊内で一番年若い。

総司も2つ上な程度だからそう変わらない。他にも年上の腕がたつ者が居ただろう。

その時、総司が声をあげた。

「さあね」

平助も斎藤も総司を見た。

「難しい話は分らないよ。土方さんは説得して連れ戻せって言うてたろ。なら言われたとおりに動くしかないじゃないか」

総司はあつさり言った。

「そんな……でも、殿内さんたちは果たし状まで書いてますよ……それって、やむ終えなければ斬っても良いって事じゃ……」

平助が言うが、総司は相変わらずの調子で

「私は人の言葉の裏側を察するのが苦手だし、推測ほどいい加減なものは無いと思ってるよ」と言い、歩き続けた。平助はため息混じりに後に続いた。

斎藤は、総司の考えが分からなかった。本気で果たし状を出す様な人間と話し合えると思っっているのだろうか……。

更に少し歩くと、四条橋が見えた。ここからは物音を立てないよう慎重になって歩き、徐々に橋に近付いて行つた。

橋の袂まで来たとき、橋の中央に人影が見えた。月明かりに照らされ、ハッキリと見えたその姿は紛れもない殿内だった。家里は見えない。

三人は連れだつて橋の中央へ向かった。時は3月の終わり。まだまだ夜風が冷たい。

橋の軋む音に気付き、殿内は三人を見た。

「沖田さんに藤堂さんに斎藤さん……」

殿内はそう呟くと、刀を抜こうと左側へ手を移動しようとした。「待つてください!」

総司はその動きを制止させると、殿内に一歩ずつ近付いて行つた。「殿内さん、話があります。私たちは貴方と戦いません。浪士組へ戻りましょう」

殿内は一瞬考えた。しかし彼は懷の刀を抜き、その切っ先を総司に向けた。

「ここまで来たら、後戻りは出来ないんだ！」

殿内の顔は紅潮し、額にはうっすらと汗が光る。総司が何か言おうとしたが、構わず飛びかかってきた。

剣を受け止めると、互いに見合う様な体勢になった。剣を合わせたまま、動けない二人……。

すると殿内は自分の剣先を総司の剣先から離し、後ろへ下がった。相当疲れたのだろう。殿内は肩で息をしている……。

平助も斎藤も、二人の気迫に思わず動けなくなった。特に斎藤は、今まで総司の剣を見たことがなかったから自分が総司の仲間ということ忘れ、観戦者になっていた。

間合いを取った殿内は再び飛び出す時を待っていた。しかし総司から隙は感じられず、しかも殺気すら感じられない。

どうすれば良いか分からなくなった殿内はむやみに斬りかかってきた。総司はその剣を受けとめ、殿内を斬った……。

その場に倒れる殿内。平助と斎藤は総司の側へ寄る。

「何故彼を斬ったんです？！まだ話し合えたかもしれないのに！」
声を荒げる平助。しかし、斎藤には分かっていた。

「峰打ち……」

沖田も平助も斎藤を見た。斎藤は構わず続けた。

「さっきの沖田さんのは峰打ちですよ？その証拠に殿内さんは生きてる。血も出ていない……今は気を失っているだけだ……」

斎藤はそう言って総司を見た。総司は少し笑みを浮かべ、頷いた。

「そういうことだったんですか。なら、今の内に殿内さんを屯所に連れて帰りましょう」

平助はそう言って懷から捕縛用の縄を取り出し、殿内へ駆け寄った。

しかし、平助が縄をかけようとした瞬間、殿内は覚醒した。そして、懷に隠し持っていた短刀で平助に斬りかかった。

平助はかわしたが、殿内は短刀を振り回してながら起き上がった。

「寄るな……触るな……」

殿内は既に元の殿内の顔ではなく、何かに取り憑かれた様な異様な雰囲気をもっていた。

三人は殿内の様子を少し離れて見守っていた。すると殿内は、腰に提げた小刀を抜いた。

「これで、良いんだよな……」

そう言うつと殿内は、腹に刀を差した。

啞然とする三人。

ゆっくりとその場に倒れる殿内。

三人は我に帰り、殿内へ駆け寄る。

平助は殿内を抱き起こし、顔を上げさせた。

「殿内さん……どうして……」

平助が言う。殿内は魂が抜けた様に虚ろな目をしながらも、平助を見て少し微笑んだ。

「家里さんは？家里さんは何処にいる？」

斎藤はせめて何か情報を持ち帰ろうと尋ねたが殿内はただ一言、

「とどめを……」

と呟いただけだった。

「……平助、離れろ」

斎藤が振り返ると、総司が立っていて刀に手を掛けていた。平助は総司の言いたいことを理解し、斎藤の方へ来た。

……斬つ。

例えるなら、静寂。

音もなく、しかし確実に振り下ろされた刀。

総司の一振りは殿内の左胸を切り裂き、殿内は絶命した。

総司は返り血に顔も、服も、赤黒く染まっていた。平助も斎藤も返り血を浴びた。

「一番最初に斬ったのが同志だなんて……」

月明かりに照らされ、血生臭い臭いに包まれながら、総司は一言そう呟いた。その声はあまりにもか細く、平助は聞こえなかった様だが、斎藤は確かに聞き取った。

3月25日夜、殿内義雄、四条橋上にて殺害。

浅葱色の誠、最初の犠牲者、（後書き）

補足説明

・子の刻^ね

現在の深夜0時

・峰打ち

刀の背中の峰（刃ではない部分）で攻撃すること。

・小刀

脇差しの種類。普段戦いの際に使うのが大刀で、大刀を損じた時に小刀を使うのが一般的だった。

浅葱色の誠く大坂にて

勇たちは今、大坂にいた。とある目的のため……。

全ては、芹沢の一言から始まった。

「そろそろ隊服が必要だな」

芹沢のこの発言を、歳三はよく思わなかった。まだまともに隊務を果たしているとは到底言えないし、隊服を着ることで目立つのも嫌だった。……ただでさえ壬生の人々から良く思われていないのに……。

しかし、歳三以外の者たちは隊服案に賛成だった。山南は、

「隊服で仲間意識が生まれ、皆が団結するのでは」

などと言つし、何より勇が一番張り切つて

「幕府から折角授かった隊だ。それなりにキチンとした格好をしないと、ずっと考えていたよ。隊服があれば気持ちも引き締まるだろう」

と、芹沢以上に乗り気だったので口々に否定も出来なかった。

大坂に来た目的は……金策。実は壬生浪士組はかなり貧乏だった。その為、借金をしなければ隊服を揃えるなど出来なかった。

「……もう、土方さんつ。いい加減そのふてくされた顔、やめて下さいよ!」

総司の声に、歳三は顔を上げた。

今は昼。彼らは昼御飯を食べる為に料亭に来ていた。歳三はこれまでの事を思いだし、考え事に耽っていたのだ。

「うるせえ、総司。ふてくされてねえよ」

歳三はそう言つと目の前の食事を掻き込んだ。

「トシ、まだ怒ってるのか……?」

恐る恐る勇が尋ねる。すると歳三は勇を鋭い目つきで睨む。

「だから、土方君と呼べって言ってるだろ。それに、俺は別に怒ってねえ」

歳三は食べ終わり、箸を置いた。向かい側の平助と目が合ったが、あからさまに反らされる。……それぐらい歳三は不機嫌な顔をしていた。

今回、大坂に来たのは7人。勇や芹沢の他に、歳三・総司・平助・野口・佐伯。彼らは昼過ぎから、色々な商家を駆け回り、資金調達をする予定だ。ちなみに芹沢たちは別室で食事をしている。

「ま、不満と言つならば……」

歳三は急に向きを変え、勇と向き合った。

「金策の事だ。俺は金策なんぞ、無理言つて借金を踏み倒してる不逞浪士と変わらねえ気がする」

すると勇は厳しい表情をしつつも、

「俺らは何れ返す。奴らみたいに踏み倒しはしないさ」

と返した。歳三は深い溜め息をつきながら

「ま、近藤さんの決めた事だ。俺は言われたとおり動くだけさ」
と言うと横になった。

勇は苦笑いしながら

「すまん。なんなら俺も行くが……」

と歳三に言う。しかし、それはかえって歳三を怒らせてしまった。

「局長が部下と一緒に借金しに行くんじゃないよ！ みつともない」

歳三はそう言うと言を閉じた。

「……なんかおかしいですよ、土方さん」

不意に総司が声を出した。部屋に居た全員の視線が総司に集まる。

「何がおかしいんだ？」

歳三は起き上がり、今度は総司の方を向いた。

「最近おかしいです。何でこそまで”局長”にこだわるんですか？

近藤先生は近藤先生なんだから、そんなに土方さんが強制しなくて
もいいでしょう」

不満そうな総司の顔。

不安そうな勇と平助。

「今の近藤さんは試衛館の道場主とは違うんだ。ならそれに応じた
態度が必要だろ」

歳三はあっさり言い返す。

「別に何の大将でもいいじゃありませんか！ 土方さんはこだわり過
ぎです！」

何時もは穏やかな総司が珍しく食いかかってくる。

その時、今まで黙っていた勇が

「いい加減にせんか！」

と怒鳴った。歳三は何か言い返そうとしたが、勇の一声で言葉を飲み込んだ。

「総司もトシもいい加減にしろ。俺は俺の思うようにやってるつもりだ」

そう言つと勇は総司の方を向き、

「トシの言うことも一理あるんだ。昔の俺とは立場が違う」

総司は不満そうに口をつむぐ。

「……ま、しかしだな……」

勇は先程の厳しい顔を解き、人指し指で頬を掻きながら少し照れて言った。

「ワシはワシだ。立場が変わったぐらいでは中身まで変わらんよ。

それにな……」

そう言つて勇は歳三に近付き、肩に腕を回した。

「トシも昔のままだよ。あと、ワシは決めた！」

そう言つて勇は歳三と総司を交互に見て、

「試衛館時代の仲間の前では、トシはトシと呼ぶぞ」

と言い、満足そうに笑った。

それを見て総司は平助と顔を見合わせて微笑んだ。勇に腕を回されている歳三は横を向いて

「好きにしろ……」

と少し照れていた。

外では桜の花が見頃を迎えている。季節は春、真っ盛。笑いあう
勇たちはまるで閑な春の陽気の様だ。

しかし更なる悲劇が待ち構えていることを、彼らはまだ、知らない……。

浅葱色の誠く大坂にてく（後書き）

前回からかなり時間が経ってしまい、申し訳ありません。

実は、当方ただ今受験生の為これから更新が遅れるかと思えます。更新案内は『秘密基地』にてお知らせしていくつもりです。これからは今まで以上に不定期更新になりますが、読んでいただけると嬉しいです。これからもよろしく願います。

浅葱色の誠々突然の再会々（前書き）

またまた遅くなつてしまいました。本当にすいません。こんな状態でも、読んで下さる読者様に、心から感謝します。楽しんで頂ければ幸いです。

浅葱色の誠々突然の再会

その日の昼から、彼らは動きだした。

勇と芹沢以外の5人は町に出かけ、各自が金策に乗り出す。目標は100両。しかし、1両でも多く金が欲しいのが実際のところだった。

佐伯又三郎は、今橋の近くの商家をあたっていた。

「どうにか100両、借してもらえまへんでっしゃるか？必ずお返ししますんで……」

この家で何軒目か分からない。相当の数を回っていた。

「えろお、すんません……100両なんて、人様にお借し出来る額やあらせんのですわ……堪忍……」

店の主人は、本当に申し訳なさそうに首を下げる。

「あ、いえいえ。いきなり押し掛けて、お金借して下さいなんて、普通は無理です。すんませんでした！」

又三郎はその店を立ち去る。

「……どないしよう……100両どころか1銭も集まらん……。皆は借りれたんやろか……」

又三郎は、歳三たちと別れてから休むことなく商家を訪ねた。初めは、金を持ってそんな商家にばかり頼んだが、大抵はケチな者ばかりで門前払いだった。

逆に少し小さな商家は、本当に申し訳なさそうに断ってくる。

「やっぱり、人間、断わりかたも大事やなあ……」

そんなことを呟いていると、目の前に茶屋を見つけた。

「ずっと働いてたんやから、少し休んでもバチは当たらんやろ」

又三郎は、そう言いながら茶屋の軒先に腰かけた。又三郎が座った事に気づいた店の者が、奥からやって来た。

「いらつしゃい。何にしますか？」

注文を取りに来たのは、弾けるような笑顔の若い娘だった。

「お団子3本、頼みます」

又三郎のがそう言うと、

「分かりました！あ、今、お茶を持ってきますね！」

娘はすぐに店の中に消えた。

くるくる動く、ええ娘はんやなあ……。

又三郎がそんな事を考えていると急に後ろの方から、

「お雪ちゃん！お団子！」

という若い男の声がした。

「あー、次ちゃん！仕事終わったんかあ？」

すると、店の奥から”雪”と呼ばれた先程の娘が、お茶を持って

出てきた。どうやら、若い男は知り合いらしい。

「仕事終わったって言うより、今休憩時間やねん。それより、お団子頼んだで！」

男はそう言つと、又三郎の後ろに背を向けた形で座った。

「はいはい。今お茶持ってくるさかい、待っててなあ」

お雪は男に告げると、

「はい、お待さん、お茶をお持ちしました。お団子はもう少し待って下さいね！」

と、又三郎にお茶を手渡した。

「おおきに」

又三郎は受けとる。

お雪が出て行つた後、後ろの男が話しかけてきた。

「あんさん、どちらさんで？」

男が振り返つた気配がしたので、又三郎は、

「へえ、京から……」

と言いながら振り返った。

又三郎は自分の目を疑った。

その男は紛れもなく、脱走した家里次郎であった。

「あ……あなた……」

家里は、みるみる顔が青ざめる。

「家里はん……ですよね？わてのこと、覚えてはります？佐伯どす」とすると家里は立ち上がり、又三郎に向き直って一礼した。

「家里次郎です。ご無沙汰してます」

「家里はん、まさか大坂にいてはったとは……」

又三郎は驚きを隠せない。

「はい、親戚が大坂にいまして……。殿内さんに逃がしてもらってからは江戸よりもこの方が目くらましになるかと思ったんです……」

家里はうつ向いたまま話す。

「いや、関西弁を話してはったんで、顔を見るまで気付かんかったですわ……」

又三郎がそう言うと、

「関西弁が話せないと怪しまれますから。結構大変でした……」
と家里は苦笑した。

そう言うと、急に家里は頭を下げた。

「……しかし、見つかったって事は、もうおしまいですね……どうぞ、斬って下さい」

「え……」

突然の事に又三郎は驚いた。

「こうして佐伯さんがいらっしゃるといことは、私を追って来たんでしょう？」

家里も不思議そうな顔をする。

「ちやいます！今回は別件どす。家里はんの事は、わてしか知りません……」

又三郎の言葉を聞いた家里は、力が抜けた様にその場に座り込んだ。

「……そうなんですか……良かった……」

「ほお……金索……」

意外そうな顔をする家里。

「ま、壬生浪士組は知つてのとおり、貧乏なんですよ……」
苦笑しながら話す又三郎。

又三郎は家里に、お茶を飲みながら自分達が大坂に来た経緯を話した。

「……それで……殿内さんは……？」

家里が恐る恐る尋ねると、又三郎は首を振った。

「殿内はんは、1ヶ月程前に……亡くなりました。果たし状を送つてきはったそうどす……」

又三郎の言葉に、家里は一瞬泣きそうな顔になったが、すぐにうつ向いた。

「殿内さんは、本当に良くしてくれました。あの頃の自分は兎に角、

目立ちたくてしょうがなかったんです……実力も無いのに……」
家里は遠くを見るような目差しをする。

「……殿内はんは、最期まで家里はんの事を一言も話さんかったって聞いてます……」

又三郎は微笑みながら言った。

「殿内さんに助けてもらったこの命、大切にしなければと、ずっと考えてました。そして、私をかくまってくれた親戚の雑用もなんでもして、ちよつとでも殿内さんに顔向け出来る様な生き方をしなくては……と……」

家里はその後、それでも全然足りないんですが……と言って苦笑した。

「いや、家里はん、変わられましたわ。前は兎に角、野心が剥き出しな印象がありましたけど、今は誠意を持って生きてはるんやって……」

又三郎の言葉に、家里は首を振った。

「私のせいで、佐伯さんを苦しめて殿内さんは亡くなった……これでも足りません……」

家里がそこまで言った時、店の奥から団子をもった雪が出てきた。

「お待たせしました！お団子です。おかわりあったら言うて下さいね！」

雪はそう言って二人に団子の皿を渡す。

「あれ……わては3本言つたんですけど……」

5本の団子が乗った皿を渡された又三郎は雪に尋ねた。

「ふふふ。待たせたお詫びと、次ちゃんの知り合いって事で2本おまけです！」

雪はそう言つと、ぺこつと頭を下げて店の中に帰った。

「……ええ娘どすな。お知りあいどすか？」 又三郎は団子の串を持ち、家里に尋ねた。

「ええ、お世話になつてる親戚の家のご主人が、ここの団子屋さんの主人と古い友達なんです」

家里は美味しそうに団子をほおばりながら言った。

「お好きなんどすね？家里はん」

又三郎の不意の言葉に、家里は目を丸くした。

「さつ……佐伯さん……私は別にお雪は……」
しどろもどろになる家里。

「わては、誰か何て言つてまへんよ」
と言いながら、笑う又三郎。

すると、家里は少し顔を赤らめて言った。

「……好きです……。彼女はどう思つてるかは分かりませんがね……」

そう言つて店を愛しそうに見る家里。彼の見つめる先には、店の中で団子作りの手伝いをする雪が居た。

「素敵なことやと思います……」
又三郎は微笑みながらお茶をすすった。

季節は春。ぽかぽかとした陽気に包まれ、家里も又三郎も穏やかな気持ちになっていた。

この最悪で最高の再会は、ちょうど殿内の死から1ヶ月が経とうとしていた矢先であった。

浅葱色の誠々噂々（前書き）

毎回遅れてしまつて申し訳ありません。読んで下さる方々に感謝します。

浅葱色の誠々噂々

団子を食べた又三郎は、そろそろ帰ろうと立ち上がり、雪を呼んだ。

「お雪はん、お勘定ええですか？」

すると、その声を聞いた家里は、
「佐伯さん、もう行くんですか？」
と、少し慌てて言った。

「そろそろ宿に帰らないいまへん。結局は仕事も出来まへんでした
が……」

又三郎は首をうなだれながら言う。

「仕事って金策の事ですか？私で良ければお役に……」
家里がそこまで言いかけると、慌てて又三郎は止めた。

「いまへん！家里はんは逃亡者どす。まだ搜索は続いていますし、
目立った事したら居場所を突き止められてしまうかもしれまへん！」

すると家里はその言葉に身震いして、
「分かりました。お気遣い感謝します」
と頭を下げた。

「はいはい、お勘定ですね」
奥からバタバタと雪が現れた。幸い二人の会話は聞こえていないらしい。

「へえ、えつと……」

と、又三郎が小銭を探していると、家里は雪に
「佐伯さんとわて、二人分を俺が払うわ。いくら？」
と言った。

「……家里はん……」

又三郎は驚いて家里を見る。

「せめて、これぐらいはさせてください」
家里は微笑んで又三郎を見た。

「次ちゃんのご馳走なんて珍しいなあ。この人、そんなにお世話になつた人なん？」

感心するような雪の言葉に、少しはにかみながら家里は、
「おう、そうや」
と、力強く答えた。

その日の夜は、皆で金策の結果報告をした。結局全員が失敗してしまい、続きは明日以降になった。

「別に金策が成功した訳じゃないのに、みんなよく酒が飲めるよなあ……」

総司は部屋の縁側から庭を見ながら呟いた。この旅館の庭は美しく、手入れも行き届いていた。

しかし、少し離れた芹沢の部屋から聞こえる騒ぎ声が、全てを台無しにしていた。

「しょうがないですよ。芹沢さんはいつでも飲んでますから……それに、近藤先生や土方さんが騒いでるんじゃないやありませんし！」

総司の隣に座っている平助は、総司を励ますように言った。

「……それはそうだけど……」

総司は頬杖をしながらため息をつく。

「あ、そうそう、金策の途中で聞いたんですが……」

平助は話題を変えようと総司にこう言った。総司は頬杖をついたまま平助を見る。「最近、とても腕の良い若い大工がいるらしいんですよ」

平助がそう言うと、総司は不思議そうな顔をした。

「大工？何が珍しいんだ？」

総司が聞くと、平助は

「なんでも、ひとつき前にやってきたらしいんですが、今まで大工なんて一度もやったこと無いのに何日かで仕事を全部覚えたんですって」

と、少し大袈裟に言った。

「ふーん。ま、それが天職だったんでしょ。元々才能があっただよ」

総司は興味無さそうに答えた。

「ただ一つ、気になることが……」

平助は急に真面目な声になり、総司を見た。総司はその目を見て、事の重要さを感じた。

「気になること？」

総司が聞くと平助は頷き、

「その人の名前は”つぐお”って言うそうです。しかも、その大工

の頭の名字は”家里”らしいです」

と告げる。総司は目を丸くした。丁度ひとつき前に行方をくらませた者の名前が出てくるとは思ってもみなかった。

「この事は……他の人は知ってるの？」

総司の言葉に平助は首を横に降った。

「まだ証拠がありません。顔も見えてませんし、会っていません。もしかしたらたまたま同じ名前かもしれません」

平助は冷静に言った。

総司はその言葉を聞いてうつ向き、庭を見た。庭の草木は月明かりに照らされ、とても幻想的に見えた。

その時、辺りは急に暗くなった。意地悪な雲が月を隠した。辺りは闇に包まれた。

「明日、行ってみよう、平助」

辺りは暗くて見えないが、ろうそくの明かりで辛うじて相手の顔は見える。平助は、ぼんやりと見える総司を見た。どこか悲しそうな目をしていた。

「明日、私と平助で家里さんかどうか確認しよう。そのあとで、土方さんに報告するか決めるんだ」

総司の言葉に平助は大きく頷いた。

総司の目は、まだ悲しそうだった。

それは、殿内を斬った時の目に似ていた……。

浅葱色の誠々鬼々（前書き）

不定期な更新で申し訳ありません。読んで下さる読者様に感謝致します。

浅葱色の誠く鬼く

次の日、再び金策のためにみんな別れて行動することになった。総司と平助は噂の立っている大工のいる店の側までやってきた。

「沖田さん、もし……もしですよ？本当に家里さんがいたら……土方さんに教えるんですか？」

平助は総司の様子を伺うように尋ねた。

「そつだよ。なんで？」

総司は平助の方を見ずに歩き続ける。

「今、真面目にやってるなら、そつとしていても良いんじゃないですか？我々の胸に留めておくとか」

平助は総司の顔をのぞき込むように言った。

「なんで真面目にやってるって思うのさ。脱走者なんだよ。平助は樂觀し過ぎ」

総司は平助の顔をにらみつけ、急に立ち止まった。

「沖田さん……？」

平助は恐る恐る言う。

「私だって……どうして良いか分からないよ……」

総司は絞るような声を出し、ずっと地面を見つめていた。

目的の店がよく見える所までやってきた二人は、物陰に息を潜めた。

「出てきますかね……」

平助が呟いたが総司は無視した。

その時。一人の女が店を訪ねてきた。

「次ちゃん！昨日、店に忘れ物してたよー！」

明るく大きな声で店に呼び掛けると、一人の男が出てきた。

「お雪！すまんなあ。おおきに」

目尻にしわを作りながら男は女に笑いかけた。その笑顔の主は、間違いなくかつての同志・家里次郎だった。

そして女が帰ると、家里は外に木の柱とカンナを持ち出し、木を削りだした。

奥から親方らしき人が現れ、家里に色々と助言をしている。

「カンナは力任せにかけらんやない。力を抜いて、手を滑らせるんや」

親方の言葉どおりに家里がカンナをかけると、長くて薄いカンナくずができた。

親方は満足そうに笑顔でその姿を見ていた。

「あらあら、精が出るねえ」

通りすがりの人に声をかけられ、親方が

「まだまだ半人前やけど、筋はええんどす」

と答える。家里は頬を赤く染めてお辞儀をした。

「沖田さん……これって……」

平助が総司を見る。

「……平助……、見なかった事にしよう……」

総司は家里から目線を外さず言った。

「家里さんは平助の言ったとおり真面目に生きてた。我々が咎める筋合いは無いよ……」

淡々とした口調を装っているが、総司の声は震えていた。平助には総司の気持ちが分かった。

「そうですね……」

平助は微笑み、総司の方を見て言った。

二人が立ち去ろうとした時、一人の男が家里に駆け寄った。それは……

「さ……佐伯さん……？」

平助が思わず声に出す。そう、金策中の佐伯が家里と親しそうに話をしている。

そして辺りの様子確かめると、二人は店の奥へと消え去ってしまった……。

「あれ、間違いなく佐伯さんだったよね……？」
総司も動揺を隠せない。

「家里に、佐伯か」

後ろから急に声がして、二人は振り返った。すると、そこには歳三がいた。

「ひつ……土方さんっ!!」

思わず総司と平助の声がそろそろ。歳三はそんな二人にかまわずに、家里たちが入った店に近付いていく。

「土方さん？一体何を……？」

平助はきょとんとしている。その時、総司が歳三から何かを感じとったのか、後をついていく。

「土方さん、まさかあなたは……」

総司は探るように歳三へ尋ねた。

「だとしたら何だ？」

歳三は冷たく言い放つと総司を振りきって店へと進む。

「沖田さん！どういうことなんですか？」

いまだ訳の分からない平助は総司に聞く。

「土方さんは……」

総司がそう言いかけた時、歳三は刀を抜いて店に入ってしまった。

二人は慌てて後を追うが、歳三は声を荒げて、

「家里次郎はおらぬか!!」

と叫んだ。

すると奥から総司たちが見た親方が血相を変えて出てきた。

「へえ、何のご用件で？ 家里っちゅうんは知りまへん……」

動揺を隠しきれない親方に、歳三は

「勝手に捜す」

と告げ、どんどん店の奥に入っていった。

「土方さん！ 何の真似ですか？」

総司は止めようとするが、歳三は辺りを捜す。そして遂に縁側から外に出て、大きな蔵の方へと歩きだした。

「土方さん！ これ以上は組に咎が……」

平助は説得を試みるも、歳三の耳には届かない。

歳三は勢いよく蔵の扉を開けると、まるで二人の居場所を知っているかのように真っ直ぐ奥に進んだ。

そして一番奥の米俵の前で足を止めると、

「家里、佐伯、出てこい」

と語りかけた。

すると物陰から、のっそりと二つの影が現れた。蔵の中は暗かったが、影は怯えているように感じられた。

「家里次郎、謀反と脱走の罪で処罰致す」

歳三は二つの影の右側にそう告げた。するとその影はその場に崩れ落ちた。

「お願いします……お願いしますから……堪忍して……もらえませ

んか……？」

家里は魂の抜けた様な声でそう言った。彼の涙が一筋、頬を伝う。

「それは出来ない」

そう言つと歳三は刀を持ち直した。ぎらりと、刀が反射する。

涙も刀も、蔵は薄暗くて相手の顔も見えないはずなのに、なぜかはつきりと周りに居た者たちの目に写った。

カチャッ。

歳三は刀を構える。

「言い残すことはないか？」

歳三の言葉に家里は少し微笑むと、

「こんなことになるなら……お雪に、好きだって言つとけば良かった……」

と言つと、震えながらその場に正座した。

斬つ

例えるなら風。無駄のない動きで確実に相手の急所を仕留めた。

家里は無言のまま、そこに倒れた。

総司も平助も、佐伯でさえ声が出なかった。歳三は既にいつもの歳三ではなかった。

「佐伯」

不意に歳三が名前を呼んだ。総司や平助は訳が分からない。しかし佐伯はその場に正座した。

「覚悟は、良いか？」

再び歳三は刀を構える。

「土方さん……？」

平助は今にも泣き出しそうな声をだした。

佐伯はひどく落ち着いた声で、

「覚悟なら、入隊したときから出来てます」と告げ、目を閉じた。

「佐伯又三郎、謀反の罪で処罰致す」

風の剣は佐伯の左胸を斬り裂き、体は家里の上に倒れた。

懷から布を取りだし、歳三は刀に着いた血を拭き取る。

「なん……ですか？」

平助は大粒の涙を流し、歳三に詰め寄った。

「家里さんは何の問題もなく暮らしてたじゃないですか！家里さんは生きたがっていた。見逃してやるべきではなかったのですか！」

平助の言葉に歳三は動じる様子はない。

「佐伯さんは、家里さんと話をしていただけじゃないですか！死ぬ必要なんてなかった！」

悲しみに満ちた目で平助は声を荒げる。

「うるせえ！お前も斬りたいのかっ！！」

歳三は平助を怒鳴りつけた。平助はビクッと体をこわばらせた。

歳三はそれ以上何も言わない平助から目線を外し、方向を変えて蔵を後にしようとした。しかし、目の前には総司が居た。

「なんだ、総司」

歳三が無理矢理通ろうとしたが、総司は動かない。

「なぜ……殺したんですか……？」

総司は穏やかに、全てを受け入れたような口調だった。

「お前までそれを言うのか？」

歳三はうつとおしそくに頭をかいた。

「誰よりも仲間割れを恐れていた土方さんが、なぜ自ら傷口を広げたんですか？」

総司の言葉に歳三の動きが止まった。平助の涙も止まった。

「……分かったような口をきくんじゃねえ」

暫くの沈黙のあと、歳三は口を開いた。

「おまえらに何が分かる？」

歳三はそう言うと、総司と平助をにらんだ。

「いいか？俺たちは浪士じゃねえ。百姓でもねえ、武士だ。会津藩お預かりの武士なんだよ！」

歳三の目は暗がりの中でも、ぎらぎらと光っていた。

「腰についてる刀は飾りじゃねえ。武士の証なんだ！その証を飾りにしないためには、鬼になるしかない」

歳三は怒鳴ると、蔵の外へ出ていった。蔵には血生臭い臭いが立ちこめ、総司と平助は暫くその場から動くことが出来なかった……。

4月、大坂にて、家里次郎・佐伯又三郎、肅清。

浅葱色の誠く椿屋く

「聞きはった？」壬生狼”の事……」

「いきなり押し掛けて、二人も斬ったんやろ？」

「裏切ったとはいえ昔の仲間なのに……」

「怖いわあ。ほんまに人斬り狼やったんやねえ……壬生狼で……」

歳三は全てを塞いでしまいたかった。目も、耳も、全部。そうすれば、何も聞かないで済む。

さつきすれ違った女たちの噂ばなしも、あの人の寂しそうな顔も……。

あのあと、勇に二人を斬ったと告げた。勇は怒らず、悲しげに微笑んで

「分かった」

と言った。それ以上は何も言わずに腕を組んで目を閉じていた。

金策については、野口が今橋1丁目の両替商・平野屋五兵衛から

100両借りる事に成功した。その金で隊服と隊旗を頼んだ。

しかし、歳三が家里と佐伯を斬ったことはたちまち噂になり、大坂から帰ってきた頃には壬生にまで広まっていた。さっきの声も、歳三が巡察中に山ほど聞いたものだった。

「ねえ、野口さん、まだ怒ってるの？」

総司は、縁側でむくれている野口に言った。

「怒ってませんよ。私に家里さんのこと黙ってたからって」

野口は総司と目を合わせずにすねる。

「やっぱり怒ってるじゃないですか……」

平助はため息混じりに言う。

野口は金策に成功し、勇たちから感謝されたものの、総司と平助が自分に黙って家里を確かめに行ったことが許せなかった。

「でも……あの時は私たちも必死で……心に余裕が無かったっていうか……」

総司は野口の怒りを鎮める言葉を探すが、中々適当なのが無い。

「今度同じような事があれば、絶対に相談しますから！本当です！」

平助も一生懸命頼む。

「……本当ですか……？」

野口は交互に二人を見る。

「本当ですっ……！」

総司と平助の声が思わず揃う。それがおかしかったのか、野口は吹き出し、

「分かりました！じゃあ、団子でも食べに行きましょうか」

と言って立ち上がった。

「あ、賛成！お腹すいた！」

総司も立ち上がる。

「お二人の奢りですけどね！」

野口は笑顔を二人に向けると、さっさと歩き出してしまった。総司と平助は顔を見合わせ、野口の後を追った。

つたく、今日は誰も声をかけてこねえ。

歳三は心の中でばやいた。

歳三は島原に来ていた。こんな時には女を抱いて気を紛らそうと思ったからだ。ところが、いつもはしつこい位に客寄せをしている店の者たちが、誰一人として歳三に声をかけない。島原にまで噂が広まっているらしい。

歳三は諦めて屯所へ帰ろうと方向を変えた。そのとき……。

「あれ、土方君？」

すっとんきような声が聞こえ、その顔を見ると……。

「やつ……山南さん……あんた、何故ここに……」

歳三は驚いた。初めて島原で飲んだときは相手の女と話をしただけで済ました山南が、まさか島原に通っているとは思わなかった。

「何故って……多分君とそう変わらないよ」

山南は少し歳三から目を反らしながら言う。

「驚いた……馴染みでも出来たのか？」

歳三が尋ねると、今度は顔を赤く染めてうつむいた。山南は話題を変えようと、

「あ、君も良かったら行くかい？その様子だと、まだ店を決めてないんだろっ？」

ときこちなく言った。歳三は少し意地悪そうに笑って、
「おう。あんたがそこまで惚れた女に会ってみたいからな」
と山南の背中を軽く叩いた。

歳三は山南の案内で、ある店の前にやってきた。

「椿屋……ここは前に飲みにきた……」

歳三が呟くと山南は微笑んだ。そして二人は中へと入る。

中は不思議な香の香りが漂っていた。店内は外側から見るよりも
明るい雰囲気、奥から三味線の音や笑い声が聞こえる。宴会をや
っているんだろう。

「あら、山南センセ、おこしやす」

店番の女が山南に声をかける。山南は顔を覚えられる位通ってい
るのだろうか。

「こんにちは。えっと……」

山南が言いかけると、奥から小さな女の子がやってきた。

「山南センセ、遅いわぁ。明里ねえさん、とっくにお待ちどすえ」
と言いながら山南を部屋に案内しようとした。その時、山南の後
ろにいた歳三に気づいた。

「新しいお客はんどすか？」

女の子は歳三と山南を交互に見ながら言う。

「そう。だから今日は先に別の部屋をお願い出来るかな？」

山南が女の子に言う、彼女は笑顔で

「少々お待ちを」

と言って元気に走り去った。

「あれは……禿かむろか？」

歳三は山南に尋ねる。

「おなつちゃんのことかい？彼女は私の馴染みに付いてる禿だよ」

山南が答えた頃、なつはまた駆け足でやってきた。

「ご案内いたします」

なつは一礼すると、二人を少し広い部屋に通した。

「ねえさんたち、呼んで来ますね」

なつは二人が部屋に入るのを見届けてからまた慌ただしく部屋を去った。

決して部屋は広くない。大人4人で、なんとか大丈夫だろうという広さだ。しかし内装は、歳三が見た中でも一番品があるかもしれない。

山南さんらしいな……。

そう思いながら歳三は笑った。そのとき、ふすまの奥から

「えろおお待たせしました、天神の明里どす」

と、柔らかな声が聞こえた。

「どうぞ」

山南が応えると静かにふすまが開き、明里は深々と頭を下げた。

そして彼女が顔を上げた時、歳三は心臓が止まるかと思った。

「お琴……」

山南も明里も歳三を見る。歳三はそれに気づいて我に返り、二人に「何でもない……」と言いながら顔を反らした。

お琴なのか……？

あの女が何故ここにいる？

「土方くん？体調でも悪いかい？」

山南の声で歳三が顔を上げる。すると明里は心配そうに顔をのぞき込む。

「お顔が真っ青ですえ」

明里と目が合い、歳三の鼓動が早くなる。

「だっ……大丈夫だ……今日は……帰る」

歳三はふらつきながら立ち上がる。

「旭ちゃん、玄関まで……」

明里が言つと、歳三の相手の旭がスッと立ち上がり、歳三について玄関まで送った。

「籠、呼ばはります？」

旭は歳三に聞いた。顔は怯えている。自分に責任を感じているのか、歳三が壬生浪士組の土方だと気づいたからなのかは分からない。けれど歳三は穏やかな顔つきで、

「籠は呼ばなくていい。あと、あんたのせいじゃねえよ」

と呼び掛ける。すると旭は微笑んで、

「おおきに」と言つて頭を下げた。

店を出た歳三の心臓は、まだ焦っていた。突然の再会に頭は混乱していた。

「嫌な夜だ……」

歳三はそう呟くと、静かな闇夜に消えていった。そう、あの時の別れのように……。

浅葱色の誠々椿屋々（後書き）

補足説明

かむろ

・禿

遊女屋に売られた子や遊女の娘のこと。遊女の身の周りの世話をし、将来的に遊女になる。

浅葱色の誠く穏やかな夜

夏にしては涼しく、静かな夜だった。

琴と歳三は二人で河原に居た。二人の間を蛍が飛び交う。

「話って？」

琴は歳三の肩にもたれながら尋ねた。

「別れよう」

歳三は抑揚のない声で告げた。琴は黙ったままだ。

琴は着ていた浴衣の帯に挟んでいた扇子を取り、ゆったりと扇ぐ。

「所詮、親同士が決めた許嫁なんだし……」

歳三はぼんやりと蛍を眺める。

「好きな女でも出来たの？」

琴は相変わらず扇ぐ手を止めない。

「別に。ただ、結婚なんて重荷なだけだ」

歳三は琴の肩を抱く。

「言ってることとやってることが違うよ」

琴は扇子で歳三の手を払うと、歳三を見つめた。

「あんだ、嘘つくとき眉間にしわが出来るって知ってた？」

不意に琴に指摘され、歳三は目を見開く。

「私、トシの事、結構知ってるつもりだったんだけどなあ。でも、別れたいと思ってたなんて知らなかった……」

琴はそう言うとその場に立ち上がる。歳三もつられて立ち上がる。

「私、トシのこと、分かってなかったかもしれないけどさ、トシも私のこと分かってないよね」

辺りが薄暗いため、琴の表情はよく分からないが、声は確かに震えていた。

「私、トシと許嫁で良かったって思ってたんだ。だって、どんなにあんたが女にだらしくなくても、必ず夫婦めおとになれるって思ってたから……」

琴は指で流れ落ちる雫をすくう。その姿は、いつもの琴ではなかった。歳三の知ってる、気が強くてどこか冷たい女ではなく、弱々しい少女の様だった。

「お琴？」

戸惑う歳三。しかし琴は躊躇いもせず、キツパリ歳三に言い放った。

「私、あんたが好きだった！」

そう言うつと琴は脇目も振らずにその場から立ち去った。歳三は暫くそこを動けなかった。

いっそのこと、頬を叩いてくれた方が良かった。

罵ってくれた方が気が楽だ。

なぜ……好きだと告げたんだ？

俺だって……俺だってまだ……。

歳三は琴の兄から別れてくれるように頼まれた。琴の家は貧しかったため、琴を身売りするか金持ちに嫁がせるかしか一家が生き延びる道がなかった。

「トシ、堪忍してくれ……堪忍してくれ……」

土下座までして頼む琴の兄に、歳三は我を通すことなど出来なかった。身売りされるくらいなら、幸せに暮らしてもらう方がまだ良いと言い聞かせ、冷たい言葉で別れようと思った。

それなのに……。

お琴、おめえはやっぱり分かってねえよ、俺のこと……。

その後、風の噂で琴は金持ちの地主の家に嫁いだそうだ。相手は真面目な好青年らしく、幸せに暮らしているらしい。琴の実家も暮らしが楽になったそうだ。

歳三は今でも別れを告げたのは間違いではないと思っている。好いた女が幸せならそれでいい。

……ただ……、もう人を好きにはなりたくない。一人の女に一生懸命恋をして、傷付くのはもう沢山だ。

歳三は自分の”恋”という感情に蓋をする事にした。もう二度と、思い出すことは無いだろう。

それなのに……。出会ってしまった。明里に。琴と瓜二つな女と。こうして歳三は悶々とした思いのまま、屯所へ戻ったのだった。

同じころ、京都守護職・松平容保は頭が痛かった。目の前に居る斎藤の口から、聞きたくなかった事が次々と報告されたのだった。壬生浪士組の芹沢とその仲間が京のあらゆる店から金を踏み倒したり、酔った勢いで乱闘騒ぎを起こしていると言っただ。それもほぼ毎日……。

「それは誠に芹沢がやっているのか？何故、近藤たちは止めようとしない？」容保は斎藤に尋ねる。すると彼はあっさりと

「近藤は芹沢に反抗出来ません。あの人は気が弱い……二人は正反対なんです」

すると容保は

「ならばそなたが阻止出来ぬのか？」

とすぐる様な目で訴える。しかし斎藤は冷静に

「奴らには剣の心得がある上、各々が相当の腕です。下手に口を出したら命まで危ないでしょう」

と言う。

容保は気が重かった。結局、家臣たちの言うとおりだったのか。あの者たちに力を貸したのは間違いだっただのか。

「それから、殿にもう一つご報告が……」

斎藤は言いづらそうに話す。悪い予感がした。

「斎藤、それは良い話か？悪い話か？」

容保の言葉に少し躊躇いながら、斎藤は

「悪い方です……」

と話した。

容保はため息を付きながらも、

「申してみよ」

と言った。

「実は、壬生浪士組は既に3名の浪士が死んでいます。それも内部争いで……」

これには容保も驚いた。

「その様なこと、近藤らからは何も聞いておらぬ。隠しておるのか」
容保の言葉に斎藤は

「浪士組の中にも詳しく知らぬ者が居ます。内々でカタをつけたの
でしょう」

と答える。

容保ははじめて、彼らを会津藩お預かりにしたことを後悔した。
不逞浪士との乱闘に巻き込まれた訳でなく、内部の争いで3人もの
犠牲者。しかも彼らはそれを揉み消そうとしている……。

「のう、斎藤……私は間違っていたのかのう……。じいたちの忠告
を聞けば良かったのかの……」

容保はふと外を見る。彼の心のなかとは違い、穏やかな夜……。

「しかし殿、彼らは必ずしも悪い者ばかりではありません」

斎藤は初めて壬生浪士組を肯定した。それに容保は驚いた。

「殿、先日彼らは大坂へ行きました。その時に同士が2人死にました……」

斎藤はひと呼吸置いて、

「そのものたちを斬った本人はその後、何度も大坂へ足を運んでおります」

と言う。容保は意味が分からず、

「なぜじゃ？」

と聞き返した。

「死んだ男の一人は隊を脱走して大坂に隠れ住んでおりました。そして彼には新しい生活も、好いた女子おんなこもありました……。斬った浪士はそれを分かっていて、斬った後で現場の片付けを手伝ったり、死んだ男の世話になった者たちへ一人一人詫びの言葉をかけたそうです」

斎藤は一気にこれだけを言うと、急に神妙な顔付きになった。

「殿、斬ったそのものは迷ったのではないでしょう。しかし脱走を許せばこれからも似たような者が出るかもしれない。そのために心を鬼にし、同士を斬ったではありませんか？」

容保は言葉が出なかった。まさか浪士組の中にそれほどまで隊を思い、相手にも自分にも厳しく振る舞う者が居ると言うのか……。

「それも一つの武士道かの……。信念を貫くには己にも厳しく……と……」

呟くような容保の言葉に、斎藤は改めて頭を下げた。

「殿、もう一度あの者たちに機会をお与え下さい。自分も今まで以上にお役目果たせるように致します」

斎藤の言葉に容保は

「顔をあげよ、斎藤。そなたの申したきこと、よう分かった。それに……」

と言うと、穏やかな笑顔で

「そなたが誠に危ないと思ったら、誰であろうと命がけで止めるはずじゃ。それが無いうちは大丈夫だろう」

と優しく語りかけた。久々に見た容保の笑顔に斎藤は、

「ありがたき幸せにございます」

と再び深々と頭をさげた。

「そう言えば、何故近藤らは大坂に行ったのじゃ。同士集めか？」
容保は気になっていた。隊の上役たちが揃って大坂に行くことが不審だったからだ。

「それは殿、金策にございます」

斎藤はあっさりと告げる。

「金策じゃと?!」

予想外の答えに驚く容保。

「殿、壬生浪士組は貧しいのです。彼らの着物は京に来てから変わらず、既にボロボロ。生活一般も八木家に頼っているのが現状なのです」

「そうか、そうだな、分かった。どうにか致そう。しかし、壬生浪士組は目立った働きをしておらぬ。それなのに突然に金を与えるなど……」

容保が弱気に言った。

「殿、壬生浪士組に俸禄をお与え下さい。ひとつきに5両……いや、3両で良いです」

斎藤の言葉は驚くべきものだった。

「斎藤、何を申すか……3両など……」

「お気持ちは分かりますが、ここで殿が俸禄を授けて下さるなら、彼らは実力以上の働きをするでしょう」

容保は考えた。壬生浪士組は今のところ、目立った働きをしていない。しかし、それがもし貧しい為だったら……？ここで助けてやるべきではないのか？

「殿、一つだけ。壬生浪士組は今、隊服と隊旗を作らせております。大坂の金策もその為に行ったのです」

容保は斎藤の言葉に閃いた。

「斎藤、決めたぞ。隊服と隊旗の金を近々工面致す。臨時の手当ても致そう。そして次に何か大きな働きをすれば、月3両を約束しよう」

これは会津藩が壬生浪士組に出来る、最善の措置だった。斎藤はこの言葉を待っていた。

「皆、喜ぶでしょう。そして更に活躍致します」

斎藤が頭をさげると、容保はため息混じりに

「壬生浪士組の真の局長はそなただな」

と言った。斎藤は、

「私よりも、土方歳三の方が秀でております」

と言う。

「土方……それは？」

「大坂で同士を斬ったものです。副長ですが、あの者には近藤とも芹沢とも違う野心があります」

斎藤の言葉に容保は驚く。斎藤にここまで言わせるとは……。

「土方……か。一度ゆっくり話をしてみたいの……」

容保は頼杖を付きながらまた外を眺めた。相変わらず穏やかな夜だった。

浅葱色の誠々穏やかな夜々（後書き）

補足説明

・3両

斎藤の提示した3両は、当時の俸禄（給料）にしては高額。（ちなみに1両と少しあれば5人家族がひとつき生活出来た）

浅葱色の誠く隊服く

「近藤、面^{おもて}をあげよ」

容保の言葉に、勇は顔をあげる。

「どうじゃ、京へ来て一月^{ひつしき}が経ったが」

容保の問いかけに、生き生きとした表情で

「殿のお陰で日々、順調でございます」

と答える。それに満足そうな顔を浮かべる容保。

「時に近藤、そちたちに任せたい事があるのじゃが」

不意に容保が勇に話しかける。

「は、何でございましょう？」

勇が不思議そうな顔を見ると、容保は真剣な表情でこう言った。

「壬生浪士組に上様の警固を申し付ける」

暫くの沈黙。

「……殿？」

勇はイマイチ状況が把握できない。

「そちたちが京へ来たのは上様の警固である。そして上様は近々江戸へお戻りになるのだが、そのための警固を壬生浪士組に申し付けようと思う」

容保の言葉の意味が次第に分かり、勇は落ち着きを無くす。

「全力で上様をお守り致しまする！」 勇が深々と頭を下げると、

容保はここぞとばかりに話を変えた。

「それでじゃ、近藤。そちたち、揃いの羽織を作れ」

勇は驚いた。丁度今、先日金策で得た100両で隊服と隊旗を作らせているところだったからだ。

「殿、実は……」

齒切れの悪い勇に容保は、

「なんじゃ、不服かの？」

と聞き返す。

「滅相もございません。実は既に頼んでおりまして……」

容保は斎藤の報告で既に発注済みなことは知っていたが、自然と金をやるための機会を狙っていたのだ。

「そうかそうか、もう注文しているとは結構。代金はこちらで負担する故、後で知らせよ」

と笑いかけ、更に

「壬生浪士組には大坂まで上様をお守りしてもらう。警固が上手くいけば俸禄も考えている故、励むのじゃ」

と勇の肩に手を乗せて言う。ちなみに、これも壬生浪士組に資金援助をするための口実だった。

「ははっ！」

勇は額が畳に擦れるぐらい深々と頭を下げ、容保はそれを満足したように眺めた。

「……そちの言った通りにしたぞ。不自然ではなかったか？」

勇が帰ったあと、容保は斎藤に話す。隣には老中も居る。

「はい、これで壬生浪士組は益々進化していくでしょう」

容保の言葉に斎藤が返すと、老中は少し不満そうに

「あのものたちに100両ももったいのうございます。更に俸禄のお約束まで……」
と容保に言う。

「良いではないか。これでかけた金以上の働きをすると斎藤も言うておる。それに……」

容保は一呼吸置いて続ける。

「近藤の目を見ていたら、あの者には任ても大丈夫そうな気がしたのじゃ」

と二人に告げる。

こうして後日壬生浪士組には隊服と隊旗が届いた。形式的には会津藩からの100両で作ったものと言うことになる。

隊服が届き、早速皆で試着も兼ねたお披露目をする事になった。ちなみに勇と芹沢は警固の打ち合わせのため、容保の元へ出かけている。

「汚ねえ着物でも上が立派なら、らしく見えるもんだなあ」

感心したように自分を見渡す原田。

「なんだか我々には勿体ないですね……」

源三郎は申し訳なさそうに自分の羽織りを見渡す。

「勿体ないなんてことあるか！我々は会津藩お預かり！これぐらい当たり前なんだよ！」

平間が源三郎にそう言うと、平山も相槌をうつ。

「ま、とにかく、この羽織りに恥じぬ様、上様にお勤めしなくてはいけないと言うことだな」

永倉は目を輝かせてそう言った。

羽織は浅葱色で、袖口は白のダンダラ模様。背中には”誠”の文字が染めぬいてある。

「でも、袖のダンダラ模様が忠臣蔵を参考にしたってのは分りますが、なぜ浅葱色なんでしょうか？」

不意に野口が隣にいた平助に問いかける。

「そういえば……。江戸で浅葱色は田舎物を示す色ですし……。そのことは近藤先生たちも知ってるはずですよね？」

平助も首を傾げる。

「それは、切腹袴の色だからですよ」

急に聞こえた声に、一同は辺りを見回した。すると、皆の後ろから山南が穏やかな表情で現れた。

「切腹袴？」

総司は山南に近寄り、聞き返した。

「そうです。浅葱色は近藤さんも芹沢さんも互いに意見が合ったんです。武士が覚悟を決める切腹の時の様な緊張感を持って、勤めに励む様に……とね」

山南の言葉を聞き、一同は納得した様に首を上下に振ったり、目を丸くした。

「だからみなさん、このことを忘れずに、上様の警護、立派に果たしましょう！-」

山南が声をかけると、みんな口々に歓声をあげたのだった。

「随分とご立派ですね、山南先生」

皆と別れて部屋へ帰る途中、すれ違い様に新見が山南に告げた。

「何のことです？」

山南は不思議そうに尋ねる。

「さつき隊士たちの前で言っていた言葉、まるで局長のようだ。立派なことです」

新美は皮肉を込めて山南に言い放つ。

「何が言いたい？」

山南は憤慨した顔で新見を睨んだ。

「我々はあくまで副長。自分の身をわきまえてほしいだけです」

新見は冷たく言うと、そそくさと場を立ち去った。

山南はもちろん、目立つつもりなど無かった。ただ、隊服の由来を伝えたかったただけだ。それなのに……。

「気にすんなよ」

後ろから声が聞こえて、山南は慌てて振り返った。そこには歳三が立っていた。

「土方君……見ていたのかい？」

山南は目を合わせないようにうつむいた。恥ずかしいような、嬉

しいような気持ちだった。

「新見は悔しいのさ。あんたに全部持っていかれて。本当はあの男が話したかったんだろ」

歳三は呆れたようにため息混じりで言った。

「そうだったんですか……そうと知ってれば……」

山南が言いかけると、歳三は首を横に振った。

「新見が言えば皮肉に、俺が言えば厳しくなってしまう。みんなに伝えるのはあんたが適任さ」

歳三はそう言って山南の肩を軽く叩いて立ち去った。

なんて大きな男だろう。土方歳三は……。

山南は肩に残る少しヒリヒリとした感触をかみしめながら、そつとそこを擦った。

数日後、壬生浪士組は揃いの羽織を着て將軍・家茂を警固した。いえもち彼らの働きが評価され、会津藩から俸禄が約束されたのは言うまでもない。

更に彼らは帰京するまでの2週間に隊士を募った。大坂での金策で知名度を上げ、將軍警固によって更に壬生浪士組の名は知れ渡っていた。そのため、新たに20名の隊士を仲間にして彼らは帰京した。

すべてが上手くいっていた。

いのちのつなぎ

破滅と前進と禁忌

やわらかい春の陽気に包まれ、鳥は囀り、花が咲く。心地よいそよ風が、ふわっと頬を撫でる。

芹沢鴨は不機嫌そうに、境内へ横になる。屯所から程近いこの壬生寺の境内で横になり、昼寝をするのが芹沢の日課だった。正確には、自分の姿に恐れて寺から退散する子供たちの姿を見るのが好きなのだが、今日は生憎子供は居ない。

芹沢の目の前を、白い蝶々がひらひらとやってきた。蝶々は芹沢の顔の辺りを飛び、優雅に舞う。

芹沢は蝶々を手で払うかの様な、ごく自然な動きで真つ二つに斬り捨てた。音も、無駄な動きも全くない。

芹沢は何もなかったかの様に再び横になり、寝ようとした。そのとき……。

「お侍はんって、気が短こおて怖いわぁ」

背後から、ねっとりとした女の声が聞こえた。芹沢は面倒そうにゆっくりと振り返ると、女が微笑んで立っていた。歳は30前後だろうか。しかし、着ている着物は派手。真つ赤に塗られた口紅が嫌でも目に入る。

芹沢は以前、この女を見たことがあった。屯所の向かいに住んでいて、確か主人らしき男に家へ引き戻されていた。ということは、向いの前川家の家族か……。

芹沢はそんなことを考えつつも、自分には関係ないというように、女に背を向けて眠ろうとした。

「せやけど……」

女は芹沢の態度に小さくため息をつきながら言った。

「あんたの気持ち、よお分かるわ。ウチも蝶々、嫌いやもの」

芹沢はゆっくりと起き上がり、女の方に顔を向けた。

「知ったような口叩くんじゃねえよ。昼寝の邪魔だ」

芹沢は威圧的にこう言うのと立ち上がり、女の横を通り過ぎようとした。

その時、着物の裾に抵抗を感じ、立ち止まる。女が裾を掴んでいた。

「なんだよ」

芹沢は一段と不機嫌そうに言い、女の手を振り払おうとした。ところが、出来なかった。

女は、泣いていた。

さっきまでの威勢の良さは消え失せ、精一杯の力で芹沢の着物を掴み、一筋の涙を流していた。

「うちを……助けて……」

女は必死で芹沢に懇願してきた。芹沢は心の奥の忘れかけていた感情を、無造作に掴まれた気分だった。

その時……、

「お梅！こんな所におったんかつ！！」

お梅と呼んだ男は、以前この女を屋敷の中に連れ戻していた者で、芹沢は女の主人だと思っていた男だった。

男の怒鳴り声を聞いて、お梅は体をびくつかせた。そしてその場に凍り付いた。

「屋敷から出るなと言ったやろ！お前は何を聞いとんのや！！」

男はお梅に近付き、芹沢を掴んでいた腕を強引に引き寄せた。お梅は怯え、体は震えていた。

「だんなはん、ご迷惑おかけしました。後できつう言い聞かせます」
男は芹沢の方を向くと、媚びる様にこう言った。

何故だろう。

芹沢は無性に腹が立った。

男に対してか、お梅の涙に対してか……よく分からないが、この一連の流れがとても不愉快だった。

その後のことはよく覚えて無い。右手に少し違和感があるから、男を殴ったのだろうか。左手はお梅の細い腕をしっかりと掴んでいる。

「あんた、なにしてんの。どうなってもうち、知らんえ」

お梅は状況が飲み込めず、混乱した様だった。逆に芹沢は表情一つ変えず、黙々と歩いている。

暫く歩いて、ある場所に着いた。壬生の屯所の前だ。

「み……壬生狼……」

お梅は軽蔑したような口調で呟く。

「俺はこの筆頭局長だ。お前が望むならここで暮らせる。あの男の所に戻りたいなら別だがな」

芹沢は面倒くさそうに言う大きな欠伸をした。

お梅は迷わずに芹沢に告げた。

「ここに住む。ほんまにええんやね？」

芹沢はお梅を少し見て、何も言わずに屯所の中へ入って行った。お梅も芹沢に続いた。

この出会いは、禁忌だったのかもしれない。

恋と呼ぶには唐突すぎて、愛と呼ぶには未熟すぎる。

しかし、惹かれあってしまった。

出会ってしまった。

この先に待ち受けている破滅など露知らず……。

破滅と前進（紅（あか））

藤堂平助は、錯覚かと思つて障子を閉めた。

自分の目がおかしいんだろうか。今、芹沢の部屋に、女が居た気がする。しかしそんなハズない。昨夜は芹沢派は屋敷内で飲んでいたし、昼から島原に行ったとしても同衾は無理だろう。

平助の頭がごちゃごちゃに絡まっていると、障子の奥から声が聞こえて来た。

「藤堂！用があるなら入れ！」

平助は体をこわばらせ、反射的に障子を開けた。

そこには、芹沢と一緒にやはり女が居た。昼間だと言うのに毎度の如く酒を飲む芹沢。女はその酌をしていた。

「藤堂、用件は何だ？」

芹沢は顔を赤くしながら平助を見る。

「あ。えっと、前に話していた大坂行きごうての件です」

平助は我に返つて勇からの言伝ごんてんを話す。

「明後日、大坂へ不逞浪士の捕縛に行きますが、芹沢先生の所は誰が行くか確認したいと思ひまして……」

恐る恐る平助が告げると、芹沢は面倒な顔をして

「近藤も土方も山南も行くんだらう？なら新見たちを残らせて俺と野口だけでいい」

と言ひながらまた酒を飲んだ。

「分かりました。では、近藤先生に伝えておきます……」

平助は無意識に女を見た。偶然目が合い、女は会釈をしてきた。

平助も慌てて頭を下げる。

「ああ、言い忘れてた。こいつはお梅だ。今日からここに住む。そいつも伝えとけ」

芹沢は不敵に笑いながら言う。するとお梅は平助に向き合って、

「お梅どす。お世話になります」
と言って挨拶をした。

「藤堂平助です。よろしく……」

紅。

顔を上げたお梅を見た平助はそう思った。一番に目に飛び込んで来たのが、お梅の紅い紅い口紅だったからだ。

着物も赤い派手な模様で、かんざしも朱。少し乱れた横髪と白い肌がなんとも色っぽく、平助はその姿に鼓動が早くなっていくのを感じた。

「顔が赤いぞ、藤堂」

からかう様な顔で平助を見ながら芹沢は笑う。平助は恥ずかしくなつて急いで立ち上がり、

「失礼しましたっ！」

と急いで部屋を出た。障子の奥では、微かに芹沢とお梅の笑い声が聞こえる。

自分の単純さに嫌気がしてきた平助は足早にその場を立ち去り、勇の部屋に向かった。

「はあゝ？ 芹沢に女？」

歳三の素頓狂な声に頷く平助。

「昼間から飲み歩いたり、借金を踏み倒していたと思ったら、今度は女ですか……」

山南はため息混じりに言う。

「それで？どんな女だったんだ？どこから来たと言っていた？」

勇も飽きた様に平助へ尋ねた。

「詳しくは言っていませんでしたが……紅い口紅をしたとても派手な女でした」

平助の言葉を聞いて、歳三は興味津津に尋ねた。

「美人か？醜女しうめか？名前は？」「綺麗な人でしたけど……名前は確か”お梅”さんでした」

平助の言葉に歳三は

「ほう。名前は平凡だが、美人か……」
とにやつく。

そんな歳三を横目に、小さく咳払いをして山南は話し出す。

「とにかく、明後日の大坂の任務に支障が出ない様にしてもらわなくては。女を理由に断るなんてことがあれば……」

山南がそこまで言いかけると、歳三は反撃するかの様に、

「あいつは野口と来るって言っただから来るだろう。それに新見が自然と居残り組の局長になるんだから、そんな機会をフイにするはずねえよ」

と言う。

「そうだと良いんですがね」

山南はそう言つと深いため息をついた。

一抹の不安を残しつつ、時は過ぎてゆく。

この後に待ち受ける困難を引き連れて……。

破滅と前進ゝ紅（あか）ゝ（後書き）

補足説明

・ 同衾

遊女を連れ込むこと

破滅と前進の友

「不逞浪士の捕縛と言っても、呆気なかったなあ……」
欠伸混じりに呟く原田。

「お前の言うのも一理ある。こんな大坂の藩士どもでも簡単な仕事だろうに……」

頷きながら、団子を頬張る歳三。

「まあ、確実に捕縛せよと言うのが今回の任務でしたから、間違っ
てはいませんよ」

微笑みながらお茶をすすする山南。

大坂に来て2日目。実は昨夜、頼まれていた不逞浪士の捕縛が終了し、目的は果たされたのだった。

勇と源三郎は報告のため、奉行所へ行っている。残りの8人は夕暮れの待ち合わせまで適当に時間を潰していた。

「それにしても……」

歳三は辺りを見回す。

「総司や平助の姿が見えねえが……」

歳三の言葉に、また欠伸混じりで原田が答える。

「ああ。あいつらなら、芹沢にくつついて行っただぞ。野口や斎藤も
だ」

原田の言葉を聞いて、歳三は悪態を吐いた。

「真っ昼間から酒でも飲んでるに決まってるじゃねえか！野口はと
もかく、あいつらまで……」

山南もこれには暗い顔で、

「大坂でも芹沢さんの京での悪評が伝わりつつあるだけに、これ以上問題を起こすのはマズいですね……」
とため息をついた。

「……遅いですね……」

「……内山様はお忙しい方なですよ……」

さつきから、どれだけ待っているだろう。勇も源三郎も、ただ捕縛の浪士を引き渡し、その旨を報告するために来たのに……。もう、太陽は一番高い所まで昇っていた。

「待ち合わせを夕方にして良かったですね。昼なら間に合わなかったですよ」

源三郎の言葉に勇も微笑む。

その時、若い藩士が部屋に入ってきた。

「壬生浪士組殿。内山様はお忙しく、今暫くお待ち頂きたい。その代わりと言ってはなんですが……」

藩士がそう言つと、膳を持った女中たちが中へ入り、勇と源三郎の前に膳を運んだ。

「昼餉をお持ちしましたので、よろしければお召し上がり下され」
驚いた表情を隠しきれない二人に、藩士は優しく微笑んだ。

「野口！酒がすすんでねえぞ！」

野口は芹沢の怒鳴り声で我に返った。

「すみません！いただきます」
作り笑顔で頬張る酒は、なんて苦いんだろう……。

野口の頭の中は、罪悪感でいっぱいだった。実はこの座敷、普段は夜からの営業なのだが、芹沢のために昼間から開けてもらったのだ。

普段はこういう仕事をするのは決まって平間や平山だった。野口は後ろについて、一緒に歩き回って、時々大きな声を出すだけだ。しかし、今日は自分以外にそんな事をする人間はいない。総司や平助にそんな事をさせられるはずが無い。自分のそんな姿を見られるのは、真剣勝負で錆刀を持つより嫌だった。

「芹沢さん、お酌しますよー」

総司は無邪気な笑顔で酒を注ぐ。芹沢はそれに上機嫌で応える。

何故、総司はあんな屈託のない笑顔で芹沢と付き合えるのか？自分は芹沢という男に嫌気が差しているというのに……。

「酒が進みませんな」

不意に右横から落ち着いた声が聞こえた。斎藤だった。

「いえ、飲んでますよ」

野口は自分に出来る精一杯の笑顔で酒を呑んだ。酒は静に胃へ流れ落ちて行く。

斎藤はそんな野口の様子をじっと見つめた後、暫く沈黙していた。

「……どうされました？」

野口が尋ねると斎藤は一言、

「ちょっと散歩でもしましょうか」

と言つて立ち上がった。

「でっ、でも芹沢先生が……」

野口は慌てて斎藤に言つと、

「沖田さんが見てくれますよ」

と言ひ、斎藤は部屋を出た。野口は少し迷つたが、斎藤の後についた。

さつきから、斎藤は一言も言葉を発しない。野口の2、3歩先を歩き、晴れた空を眺めている。

「あの……斎藤さん？」

野口が声をかけると、不意に斎藤は立ち止まつた。そして店の縁側に座り込んだ。野口もそれに続く。

「……沖田さんです」

唐突に放たれた言葉に驚いて、野口は斎藤をみる。

「沖田さんが……野口さんの様子がおかしいから、部屋から出て話を聞いてくれって」

野口は面食らつた。心臓の鼓動が速くなる。

「い……いつ聞いたんですか？」

野口の言葉に、斎藤は微笑んだ。「藤堂さんが。きっと沖田さんから目配せされたんでしょうね。私にそう伝えてくれました。あの二人はやっぱりスゴいですね」

斎藤は、最後にクスツと笑う。

「……やっぱり……あのお二人には敵いません。剣も、絆も……信

念も」

野口の言葉を、斎藤は黙ってただ、聞いている。

「あの二人は私なんかより高い高い志があつて、剣も努力なさつて、しかも自分に素直です。特に沖田さんなんか」

野口は心の何処かで、これ以上話すと今まで自分が積み上げて来た何かが崩れる様な予感がしていた。けれど、気持ちには押さえられなかった。

「あんな無邪気に笑つて、剣の腕前も一流で、しかも近藤先生という素晴らしい師匠がいて……なのに、芹沢先生は……」

野口はそこまで言いかけてハツとした。自分は何を言おうとしているんだ。

慌てて斎藤を見ると、彼は首を横に振った。

「今のは聞かなかつた事にします」

斎藤はそう言いながら、庭に咲いていた花を一本摘んだ。

「確かにあなたは芹沢派の中では浮いてます。新参者の私が言うのも失礼ですが、あなたは近藤先生の方と合うでしょうに」

斎藤はクルクルと花を回しながら言った。

「でも、」

斎藤はその花を野口に渡して立ち上がる。

「あなたは今、芹沢先生が師匠です。彼を否定する事は、自分を否定する事です。それに、あなたは素敵な友をお持ちです」

「友？」

野口も立ち上がる。

「沖田さんも藤堂さんも、あなたを大切に思ってます。本気で心配していたから、私にあなたのことを託したんですよ」

野口は手元の花を見た。名前も知らない一輪の花。無造作に手折れたこの花は、数時間後に萎れるだろう。けれど水にさせば、わずかでも命を永らえられる。

「沖田さんや藤堂さん……いや、試衛館の方々の絆に、最初から勝ち目なんか無いんです。彼らの過ごして来た1年は、これから我々と過ごす1年より深いんです」

斎藤はそう言いながら、野口の肩を叩いた。

「所詮我々に入り込む隙なんかないんです。でも、これからいくらだって絆は結べます」

野口が顔を上げると、斎藤の笑顔があった。普段は寡黙な男だが、笑った顔は穏やかで優しい。

「ま、中途半端な者同士、またいつでも愚痴をこぼし合いましょう。もっとも、私の方が年下ですが」

そう言って斎藤は、白い歯を見せて笑った。つられて野口も笑った。野口は久し振りに、心から笑えた気がした。

部屋へ帰ると、芹沢は寝ていた。

「おかえりなさい」

平助が微笑みながら野口に声をかける。総司も笑っている。

野口は小さく一礼して笑い、斎藤を見た。斎藤も口元が上った。

「さあ、野口さん、吞んでください！」 総司がいつもの調子で徳利を持って来た。野口は注がれた酒を一口で呑んだ。

さっきの酒とは違う、甘みのある、優しい舌触りだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3534a/>

鬼と仏

2010年10月8日23時00分発行